

2023-8-25 デジタルアーカイブフェス2023～デジタルアーカイブで地域の価値を再発見する～

10時00分～16時30分

<開会>

○司会（高津） それでは、時間になりましたので「デジタルアーカイブフェス2023」を始めさせていただきますと思います。

本日は、御多用の中、御参加いただきまして誠にありがとうございます。

私は、本日、第Ⅰ部、第Ⅲ部の進行を務めます、内閣府知的財産戦略推進事務局の高津と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、まず、開始に当たりまして、諸注意事項を申し上げます。

当イベントの撮影、録音・録画は自由でございますけれども、発表者から部分的に撮影及び録音・録画不可の申出がありました場合には、そちらに従っていただきますようお願いいたします。

また、本日のイベントの様子の動画は、後日、YouTubeのジャパンサーチ公式チャンネルに掲載をする予定でございます。

なお、本日のプログラムの詳細、登壇者の発表資料につきましては、デジタルアーカイブフェスのホームページ上に掲載いたしておりますので、必要に応じて御活用いただきますようお願いいたします。

また、当イベントの様子をSNS等で発信される際には、画面にもありますとおり、ハッシュタグをつけての御発信に御協力いただきますようお願いいたします。

また、登壇者に御質問がありましたら、ZoomのQ&Aのほうへ御投稿をお願いいたします。今回はZoomでのみ質問を受け付けております。御質問のある方は、YouTubeではなく、Zoomのほうから御参加いただきますようお願いいたします。

なお、頂いた御質問につきましては、できる限り各セッションの中でお答えするように努めてまいりますけれども、回答し切れなかった場合には、後日、デジタルアーカイブフェスのホームページ上に質問と併せて掲載させていただきたいと思っております。

それでは、開会に当たり、主催者を代表して、デジタルアーカイブジャパン推進委員会議長、星野剛士内閣府副大臣より御挨拶をさせていただきますが、本日、星野副大臣は所用がありますため、ビデオメッセージでの御挨拶とさせていただきます。

○星野副大臣 皆様、こんにちは。内閣府副大臣の星野剛士です。

御参加の皆様には、日頃よりデジタルアーカイブ活動への御理解、御協力を賜り、誠にありがとうございます。「デジタルアーカイブフェス2023」の開催に当たり、主催者を代表して御挨拶を申し上げます。

デジタルアーカイブは、社会が持つ知や文化的・歴史的資源等の記録を未来へ伝えるとともに、イノベーションの源泉ともいえるべきデータやコンテンツの共有基盤となるもので

す。例えば、教育や研究、観光、地域活性化、防災など、様々な分野での利活用が期待されています。

デジタルアーカイブが日常的に活用され、多様な創作活動を支えるデジタルアーカイブ社会の実現は、知的資産の交流・融合を通じた新たな価値創造の活性化を目指す我が国の知財戦略においても、重要課題の一つに位置づけられています。

このようなデジタルアーカイブの意義に鑑み、政府においては各分野のアーカイブ機関等と関係省庁が連携し、アーカイブの構築・共有と利活用、推進に向けた取組を「デジタルアーカイブジャパン」として推進しています。

その中心プロジェクトとして、デジタルアーカイブ利活用の分野横断プラットフォームであるジャパンサーチを2020年に公開し、さらに、ジャパンサーチの核としてデジタルアーカイブの拡充と利活用の取組を促すよう「ジャパンサーチ戦略方針」を定め、各分野の連携アーカイブ機関等における取組を推進しております。

昨今のコロナ禍においては、様々な分野の創作活動や知的活動を支えるデジタルアーカイブの役割が広く再認識されました。ジャパンサーチにおいては、様々なデジタル情報を網羅的にナビゲーションできるよう連携先の拡大などに努めており、地域の文化的資源や自然科学系分野などのデジタルアーカイブとの連携拡充には特に注力しているところであります。

このような中、デジタルアーカイブ社会の実現に向けては、産学官の連携強化が重要であり、幅広い関係者の連携促進を図るべく、今年もデジタルアーカイブフェスを開催いたします。

今回は「ーデジタルアーカイブで地域の価値を再発見するー」をテーマに、地域アーカイブが持つ可能性や、デジタルアーカイブを活用した地域振興に資する取組について共有を図ります。併せて、昨年から創設した「デジタルアーカイブジャパン・アワード」の表彰を行うとともに、各分野における先進的な取組事例を紹介いたします。

本日のイベントが御参加の皆様にとって今後のデジタルアーカイブ活動を展開するためのヒントとなれば幸いです。

最後となりましたが、御登壇を賜ります先生方に改めて厚く御礼申し上げるとともに、本日御参加の皆様方のますますの御活躍と、関係機関のますますの御発展を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

<第Ⅰ部> シンポジウム

(1) パネルディスカッション

○司会（高津） それでは、早速、第1部のプログラムに入っていきたいと思います。

最初のプログラムはパネルディスカッションになります。今回のフェスのキャッチコピーは「ーデジタルアーカイブで地域の価値を再発見するー」でございますので、まずはデジタルアーカイブが地域振興に果たす役割等について、パネル討論の中で御示唆いただ

るのではないかと考えております。

モデレーターは、デジタルアーカイブ学会の理事でもあり、さらに、地域振興に関わるNPO法人等の御活動経験も豊富であります、上智大学文学部の柴野京子教授にお願いをしております。

それでは、柴野先生、どうぞよろしく願いいたします。

○柴野教授 御紹介ありがとうございます。ただいま御紹介いただきました上智大学の柴野でございます。

では、早速、パネルディスカッションを始めてまいりたいと思いますけれども、今回のテーマは「地域アーカイブの可能性ー地域価値の再発見と活用ー」ということになっています。フェス全体の趣旨にもございますように、東日本大震災から10年余り、さらに、世界的なパンデミックという事態を経験する中で、教育・文化・政策・心身のケア、そのほか様々なフェーズにおいて、デジタルアーカイブの役割が認識されてきたと思います。

同時に、デジタル技術の発達も目覚ましく、汎用性の高いプラットフォームであるとか、インターフェースが次々現れてくる中で、ある意味、デジタルアーカイブのハードルは下がってきたといえますか、その利活用の可能性も広がりつつあります。

そうした中で、特に今回のテーマである地域アーカイブは、観光や産業振興はもちろん、その地の歴史や資源をその土地の人々が御自身で再発見されていくこと、その活動を通じたコミュニティーの再生、さらには、他の地域、あるいは世界に向けた横断的なネットワークの構築など、非常に多くのポテンシャルに満ちた取組であると思います。

今回は、そういうことで、実際に特色のある地域アーカイブに取り組んでいる方々をお招きいたしまして、御経験を通じた知見や課題を皆さんと共有していきたいというのが企画の趣旨でございます。

なお、先ほど御説明がありましたQ&Aなのですが、時間がありましたらパネルの中で御質問にお答えいただきたいと思います。その際にどなたへの御質問かということを書いていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

では、まず、本日御登壇いただく3人の方を御紹介申し上げたいと思います。

みんなの森 ぎふメディアコスモス総合プロデューサーの吉成信夫さん。

○吉成氏 こんにちは。よろしく願いいたします。

○柴野教授 よろしく願いいたします。

それから、大分市教育委員会教育部文化財課の串間聖剛さん。

○串間氏 よろしくお願ひします。

○柴野教授 よろしく願いいたします。

そして、3人目ですが、日置市総務企画部地域づくり課の重水憲朗さん。

○重水氏 重水と申します。どうぞよろしく願いいたします。

○柴野教授 よろしく願いいたします。ありがとうございます。

それでは、最初に、自己紹介を兼ねて、お一人10分ずつぐらいで御自身が取り組んでい

らっしゃる事業の御紹介をお願いしたいと思います。

では、最初に、吉成さんのほうからお願いしてよろしいでしょうか。

○吉成氏 それでは、紹介を兼ねてやりたいと思います。メディアコスモス総合プロデューサーの吉成でございます。よろしくお願いいたします。

「シビックプライド」という言葉は耳慣れない言葉かもしれませんが「～本と情報がひととまちをつなぐ～」ということでお話を進めてまいります。

岐阜市は人口40万人の中核市でございまして、名古屋からも実は20分ぐらい電車に乗るだけで来れるような場所でございます。

メディアコスモスは2015年に開館したのですが、複合文化施設でございまして、絆の拠点、知の拠点、文化の拠点という3つに分けているのですが、市民活動交流センターを持っていたり、ホールや展示ギャラリーも持っているのですが、中核になるのは滞在型の図書館ということで、かなり大きな図書館がこの中に入っています。

私も2015年にここに入ったときは、もともと図書館の館長でございましたが、今は全体を統括する総合プロデューサーの役割を担っています。

この写真も、皆さん、御覧になった方はいるかもしれませんが、伊東豊雄さんの建築なのでございますけれども、これは2階なのですが、非常に広い図書館が広がっている場所でございます。

図書館の理念を一言だけ御説明させていただきますけれども、私たちが大切にしたいことは何なのかということ言葉をしております。それは「子どもの声は未来の声」という言葉です。

本を通して子供たちの豊かな未来へとつながる道を応援しようと。子供の育ちを末永く見守る場所でありたいということを考えている図書館ですので、図書館で本を通じて小さなコミュニティーがつなぎ合っていくとか、そういうコミュニティーが生まれていくような場所として図書館を考えておりますので、単に本を貸すだけの場所ではなく、情報を含めて、どのようにアクションを起こして伝え合っていくのか、つなぎ合っていくのかということをお大事にした図書館でございます。

図書館長に私が着任したときに一番初めに始めた事業は、これは2015年のオープンと同時に始めた歴史講座ですけれども、「おとなの夜学」という形でスタートしました。これは何かというと、岐阜にいるけれども岐阜のことを知らないという若い人たちとか、歴史を知らないとか、私も外から来た人間ですが、そういう人たちはたくさんいますので、その人たちが興味を持ちながら、岐阜の歴史というのを足元を掘っていったら面白いじゃんというような乗りも含めながら、楽しく歴史を掘り返していくようなことができないかということで始めたのですけれども、これがもう46回です。ちょうど今日47回目があるのでございますけれども、ずっと続いてきています。

例えば「岐阜から生まれたジャポニズム」という、これは何かというと、岐阜ちゃん、うちわの話なのですが、それがパリ万博とかに出品されて行っていますけれども、そ

ういう難しい話を言葉でいっぱい聞いても子供たちは理解できませんので、ちょうどここにある印象派の絵の中に岐阜ちょうちんらしきものが映っておりますが、これを見るだけで、私たちの昔のひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんぐらいの世代がこういうものをつくって、パリ万博に出していたのだなということが瞬時に理解できるわけですよ。論理も大事ですけども、感覚的な肌合いといいますか、そういうものも大事にしながら伝えていくという活動をスタートしております。

これは今までの46回分がホームページで全部見られるようになっていますが、コロナで図書館が閉まったときに、実際、このホームページが相当見られています。

もう一つは、私たちメディアコスモスは、年間120万人の人たちがオープンと同時に押し寄せるようになって、去年も115万人来ていますので、8年たっても全然人数が減らないというちょっと不思議な場所でございます。

視察も本当に多いものですから、視察で来た人たちに本を提供するだけではなくて、情報を提供しようということで、これは市民の皆さんに投票してもらったのですけれども、ランチを食べる場所とか、お土産を買っていく場所というのはどこにあるのだろうみたいなことも含めて、それも情報ですので、これをマップにして出したところ、どんどん持っていかれるようになりまして、8年たってもいまだに持っていかれて、印刷を繰り返していると。そのように情報が本当に役に立つのだということが、身をもってといいますか、司書も含めて分かってきたということです。それは観光にならない小さな生活文化情報だということです。

それが市民によるまちライブラリーという形でも広がっていて、市民が自発的に自分ごととして、小さな図書館を自分たちで名乗りながら本を置いて、それが道になってつながっていくみたいなことが生まれていきました。

そういう流れの中から図書館の中に「シビックプライド」という、これは私たちの市長である柴橋市長がシビックプライドというものを政策の根本に置こうということで始まっておりますので、シビックプライドを大事にしたライブラリー、選書にしたライブラリーというものを図書館の中に置こうではないかということで、2020年にこういう場所を開設しているわけです。

それが基になって、今、これは第2フェーズに入っているのですけれども、第2フェーズの中で、図書館と市民協働のセクションがコラボしていきながら、価値創造をしていく場所としてメディアコスモスの存在意義をさらにはっきりとしていこうという動きが始まっているのです。

シビックプライドというのは、「これからも岐阜の地で楽しく豊かに暮らしていくための人々の誇りや心意気」であるという緩やかな定義のもとで、こういう季刊紙を出したり、それから、昨年なのですが、シビックプライドプレイスという情報拠点を1階の一番目立つ場所につくりまして、そこはまち散歩の拠点であり、「小さな観光」という言い方を私たちはしていますけれども、地域文化の可視化、これもやはり見えるようにしようと。

120万人が来る入り口の箇所に設置しました。このように岐阜の魅力的なスポットみたいなものを集めたり、こちらは歴史的・文化的な地層を地図と一緒にたどれるようになっていたりということからスタートしたら、本当に小学生は見た瞬間に全部使いこなせますし、私たちはガイドをしなればと思っていたのですけれども、みんな自分たちで使っていくという形が生まれていまして、今、非常に人気のスポットになっています。

これはしおりなのですが、岐阜の歴史をひもとくときに、やはりそこには歴史上のキーパーソンがいますので、今まさに歴史をつくって10年たったなら歴史になるような人たち、若い人たちをなるべく引きずり出して、ここで紹介したいということで、何とこちらは織田信長とか、岐阜から生まれた偉人・文化人がカードになっているのですけれども、右側には今まちづくりをやっている、関わっている人たちも出していこうということを進めています。つまり、過去と現在と未来を人的情報によってつなぎ合っていく。そこから描いた未来は、もっと豊かな未来が描けるかもしれないということを考えながらやっています。

一番大事にして今やっている事業は、情報の大もとを行政が全部つくるのではなくて、2年前から市民編集講座をつくりまして、今、市民の皆さん、3期生が受講している最中ですが、担い手がもう50人生まれています。この人たちがライターになって、書き手になって、どんどん情報を先ほどのシビックプライドプレイスの中にも入れ込んでいってもらおうということからスタートしています。多分、10年たつと行政情報よりも市民情報が多くなると思っています。

それから「思い出の一枚」という形で、昔のアルバムから長良川で泳いだ記憶とか、もう今はない市電の記憶とか、そういうものもビビッドに生き証人としてそのときに生活していた人たちの言葉で語ってもらいながら、それを残していくという活動をスタートしております。

「どこコレ？」というのは、これは仙台のメディアテークで始めたやり方だと思いますが、私たちもこうやってポストイットを貼りながら、この場所はどこなのだみたいなことをやっているのですけれども、これが物すごく反響がありまして、本当に1枚の写真にあつという間にポストイットが200枚とか300枚貼られていくようなことが起きています。その当時から知らなかった若者や子供たちまで貼っていくのです。そういうことがいろいろ起きています。

そういうフレームを、ここは複合文化施設なので、この全体をコーディネートしているのはメディアコスモス事業課という課になります。4つの課があって、当然、図書館とも連動していますので、私たちメディアコスモス事業課で集めたものはシビックプライドプレイスの中に入っていきます。シビックプライドライブラリーをやっているのは図書館でございまして、私たちが集めた一枚一枚の市民の写真は最終的には図書館のアーカイブに保存されていきますので、それが10年たつとコレクションとして公開していけるというところまで持っていこうというような構想でやっております。観光との連動も非常に強い

まちでございますので、岐阜市の中でそういうことを次々につないでいくつなぎ手にメディアコスモスはなろうという考え方でやっております。

これは全体像です。つなぎ手だよということをここで言っております。

ということで、10分過ぎましたので、これで終わりにさせていただきますけれども、また後ほどの議論で加わらせていただきます。ありがとうございます。

○柴野教授 ありがとうございます。

10分では全く時間が足りないとお考えかと思いますが、簡単な質問を最初にさせていただきますたいのですけれども、2015年に始まって、2020年から2期が始まるということですね。

○吉成氏 そうですね。

○柴野教授 そこからのプロジェクトというのは、先ほどのお話の中で、やっていく中で発展的に出てきたのだというようなお話もあったのですけれども、そういう形。

○吉成氏 もう本当にそうです。「おとなの夜学」が始まったところからがスタートですが、そこで情報がどんどんたまり始めていくので、この情報を出版したり、いろいろなオンラインで紹介したり、そういう活動が始まっていったときに、今度は図書館に来ないような人たちにも目抜き通りのところに情報を出して、ビジュアルを中心にしながら、昔の地図とかも全部簡単にさわられるような、タッチしやすいようなデジタル情報に変えて出すことで、より多くの人たちに見ていただけるようになりましたので、情報としてそういう深いものを図書館につなげる。

こういうプロジェクトの考え方の一番の目抜きの場所に出す。それは連動していく形なのですけれども、一番大もとにあったのは、図書館が情報を蓄積するときに、10年、20年という長いスパンの中で物事を考えていける場所だということが図書館長をやってよく分かりましたので、それをさらに応用していこうと今広げているということです。

○柴野教授 なるほど。どうもありがとうございました。また後ほど詳しくお話を伺えればと思います。

では、引き続きまして、大分市教育委員会のほうから「～おおいたの記憶～」について、御説明をお願いいたします。

○串間氏 それでは「大分市デジタルアーカイブ～おおいたの記憶～」について御紹介させていただきます。大分市教育委員会文化財課の串間と申します。よろしく申し上げます。

まず、大分市についてでございますが、大分市は大分県の県庁所在地でございます、中核市に指定されている人口約47万人の都市でございます。古代には豊後国の国府が置かれ、中世には大友氏が支配しており、特に戦国大名大友宗麟の時代には国際貿易都市として繁栄いたしました。江戸時代には、大友氏の改易により大分市域は多くの藩に分かれて支配されることとなりました。その後は明治時代に市制を施行し、戦後は昭和の大合併を経まして人口が急激に増加し、平成17年に隣接2町と合併し、現在の市域となっております。このような成り立ちの経緯から、大分市は市内各地域に独特の歴史文化が育まれてお

ります。

次に、事業の概要でございますが、大分市デジタルアーカイブでは対象とする資料を歴史資料館、美術館、図書館の所蔵資料に限らず、未指定の文化財も含みます有形・無形の文化財や史跡、地域の行事や伝統芸能、豊かな自然や景観、町並みなどの文化資源としております。これらは近年の急速な社会変容、自然災害などにより、これまでのように保存・継承していくことが困難となってきました。また、所蔵する資料につきましても、これまで以上に積極的な活用が求められているところでございます。

大分市デジタルアーカイブは、デジタル技術を用いることにより文化資源を次世代へ継承していくとともに、調査・研究などだけではなく、観光や教育、産業など様々な分野でより多くの人々に活用していただき、地域活性化に資することを目的としております。

事業の名称でございますが、地域の文化資源の保存・継承と活用をデジタル技術を用いて促進するということから「デジタルトランスフォーメーションによる地域文化資源の継承および活用推進事業」としてしております。総事業費は779万円で、そのうち480万円は公益財団法人図書館振興財団の助成金を活用いたしました。

事業スケジュールにつきましては、御覧のとおりでございますが、昨年度、システム構築を行いまして、今年6月1日より一般公開を開始しております。

なお、現時点での公開資料数は1,700点となっております。

次に、大分市デジタルアーカイブの特徴でございますが、サイトを構築するに当たりましては、様々なデジタルアーカイブを参考とさせていただきました。その中で、地域アーカイブとして最も大事なことは市民に利用してもらうことであるとしまして、まずは多くの市民に関心を持っていただき、触れてもらうことが必要であると考えました。市民に認知されて利用されることで、初めて活用につながっていくのではないかと考えております。

そこで、誰もが簡単に使えるような直感的なユーザーインターフェースを採用しまして、公開画像につきましては、個人像などの一部を除いてオープンデータ（CC BY）として提供することにより、なるべく利用の敷居を低くしまして、気軽に活用していただけるような工夫をしております。さらに、特定の資料を目的としている人以外でも楽しんでいただけるように、スペシャルコンテンツの充実を図っております。

では、具体的な機能でございますが、検索機能につきましては、フリーワード、時代、ジャンル、指定区分のほかに「地域でさがす」という検索手段を実装しております。これは市内の13地域ごとに専用ページを設けまして、それぞれの地域の文化資源を検索するものでございます。グーグルマップで位置情報を表示することにより、市民は自分の住む地域のどこにどのような文化資源があるのかを視覚的に把握することができます。

次に、スペシャルコンテンツでございますが、こちらは「大分市の今昔」というものでございます。古写真や絵はがきに残る過去の大分市の風景と同位置、同アングルで写真を撮影しまして、並べて掲載しております。現時点で市内37か所の比較写真を公開しているところでございます。

写真というのは最も身近で分かりやすいアーカイブでありますので、このコンテンツは大分市デジタルアーカイブの中でも人気のコンテンツとなっております。町並みや風景というのは日々移り変わっていますが、ふだんはなかなかそれに気がつかないものでございます。写真を比較することで、大きく変わった場所と昔と全く変わらない場所があることが分かると思います。どちらの場合でも、市民がその場所に関心を抱き、思いをはせるきっかけになるのではないかと考えております。

また、デジタルならではのコンテンツとしましては「3Dミュージアム」と「御城下絵図の世界」というものがございます。

こちらは「3Dミュージアム」でございますが、歴史資料館が所蔵する資料の3Dモデルを作成いたしました。撮影は一般社団法人路上博物館、採用技法はフォトグラメトリーで、Sketchfabを利用して公開いたしております。3Dモデルにより、実物展示では見ることができない角度や距離から、360度にわたる自由な視点で閲覧することが可能となっております。

こちらは「御城下絵図の世界」でございます。御城下絵図は、大分市歴史資料館が所蔵する江戸時代の城下町と祭りの様子を描いた約30メートルの絵巻物でございます。今回は「Gaze-On」という高精細Webギャラリーシステムを用いて公開しております。実物は30メートルもございますので、展示では一部のみしか見ることができませんが、このようにデジタルでございましたら、好きな場面を拡大しまして自由に閲覧することが可能であり、特に重要な場面につきましては、解説が表示されるようになっております。

次に、これまでの成果でございますが、6月に一般公開を開始したばかりでございますので、数字としての成果が主になりますが、公開と同時に県内の新聞・テレビに取り上げていただいたこともございまして、公開初日に1,200人のアクセスがございました。その後は落ち着きましたが、8月末の時点でアクセスユーザー数は7,400人、ページビュー数が約11万件となっております。また、訪問者の6割は市外からのアクセスとなっております、ひとまずは多くの方に利用していただけているのかなと感じております。

そのほか、公開後には庁内の他部署で作成した刊行物やコンテンツの掲載依頼も相次いでございまして、また、デジタルアーカイブを見た一般の市民の方からも徐々に情報提供をいただくようになっております。また、今月からはジャパンサーチとの連携も開始いたしましたので、今後、より多くの利用が見込めるのではないかなと期待をしているところでございます。

最後になりますが、今後の予定としまして、今年度はデジタル田園都市国家構想交付金を活用いたしまして、市内の指定文化財のうち、天然の岩肌に彫り込まれた磨崖仏という石仏の3D撮影を予定しております。また、地元の短期大学と連携いたしまして、市内各地域の歴史や文化、思い出などについて、語り部の方に聞き取りを行い、映像として記録を行う予定としております。これらにつきましては、今年度中にデジタルアーカイブの新たなコンテンツとして公開を予定しております。

そのほか、活用としましては、現在、複数の地元企業に商品のデザインやパッケージに利活用していただけるような提案を行っているところでございます。

今後の課題でございますが、デジタルアーカイブをつくっただけで終わりにならないように、継続的に利活用をしていただけるような取組が必要であると考えているところでございます。例えば、市民参加型のワークショップや小中学校への出前講座などを実施することによりまして、デジタルアーカイブの使い方や活用方法の周知を進めていきたいと考えております。また、ハード面でも、定期的にコンテンツの更新を行うことによりまして、リピーターを増やし、活用の促進につなげていきたいと考えております。

以上で大分市デジタルアーカイブの紹介を終わりたいと思います。

○柴野教授 どうもありがとうございました。

この御城下絵図は、私も拝見しましたがけれども、本当に素晴らしいものですね。

○串間氏 ありがとうございます。

○柴野教授 大変な高精細で、実物よりもと言うとあれですけども、迫力のある素晴らしいものだと思います。

今御説明いただいた事業の概要の中で、プロポーザルによって事業者を決定したのが令和4年7月ということですので、割と短期間に進めてこられたと思うのですが、それ以前の準備期間みたいなものはどのくらいあったのでしょうか。

○串間市 このデジタルアーカイブの準備期間は、前年度ぐらいから話が出てきたものなのですが、ただ、掲載している資料などにつきましては、それぞれの館がこれまで蓄積してきた資料を用いておりますので、これまで博物館等が集めてきた素材を使ってということになっております。

○柴野教授 では、デジタルアーカイブ化も一気に進めてこられたという。

○串間氏 高精細画像や3Dなどの一部の資料以外は、館が持っている既存の画像を使わせていただいております。

○柴野教授 なるほど。ありがとうございました。

それでは、3番目、ネオ日置のプロジェクトについて、重水さんのほうからお願いしたいと思います。

○重水氏 鹿児島県日置市は人口4万6000人ほどの町ですが、取り組んでいる報告をさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

ということで、早速、資料を共有させていただきたいと思います。皆さん、見えていまずでしょうか。

「メタバースを活用したまちづくり ネオ日置計画」ということで、メタバースにつくられたネオ日置に入ると、まず、日置市のシンボルの島津義弘公の銅像をあしらった空間が最初に目につく。そのような空間になっております。

本日紹介させていただくのは、関係人口創出事業のプロジェクトで「ひおきとプロジェクト」というものがあるのですが、その事務局長もしております重水と、本日、助っ人で

ございます。日置市内にある企業で、日置市と協定を結んで二人三脚でこのプロジェクトを進めております、LR株式会社の坊野さんと一緒に進めることとしております。

さくっと日置市の紹介をさせていただきたいと思います。

まず、日本列島の南も南にあります鹿児島県ですので、これを拡大していきますと、薩摩半島の左側、東シナ海側にありますのが日置市です。位置としては鹿児島市の真隣にありまして、日置市は非常に自然豊かな本当に田舎でございますが、30分足を延ばせば、大きなスーパー、病院などいろいろありまして、結構住みよいですよということで、関係人口創出、移住施策でこのようなスローガンで進めているところでございます。

このようなオンラインにもかかわらず、わざわざ甲冑を着て、ここは日置市にあります甲冑の体験施設なのです。ここでわざわざお送りしているのは、日置市は歴史がすごいのだということで、先ほどの岐阜県関ヶ原町とも非常に関係が深いです。それから、大分市さんとも、九州の関係で島津軍が大友さんといろいろ繰り広げたという背景もございます。歴史がすごいのだという町でございます。

歴史に裏打ちされた薩摩焼ですね。朝鮮出兵の際に陶工をヘッドハンティングして根づいた薩摩焼、それから、海がございます。サーフィンのメッカとして根づいております。それから、温泉もございまして、あと、癒しもたくさんありますよという町でございます。

農産物も、オリーブの国産化で、今、7,600本を植えて産地化を進めているところでございます。あと、日本で一番の産地となりましたお茶、こちらもございます。このような形で基幹産業は農業ということでございます。

この関係人口創出事業「ひおきとプロジェクト」の関係の派生のプロジェクトが、今回紹介する「ネオ日置計画」でございます。

まず、この「ひおきとプロジェクト」は3つのポイントがございまして、関係の見える化をしたいですということ。2つ目のBが、関係を深める。滞在してもらおう。それから、交流です。この「交流」の字は色が違いますけれども、ここの部分がネオ日置、メタバース上につくった日置でというところに関わってくる内容でございます。

一応、強力な情報発信というところもございますが、関係性をつくらうということで、日置市公式ファンクラブ「ひおきカメカメ団」は、現在、インターネット上で登録者が300名を突破してございます。この方々にメルマガだったり、いろいろな取組を今進めているところでございます。

このひおきカメカメ団の方々が、お試し住宅が日置市内に5軒あるのですが、この5軒に泊まる権利の対象となりますよということで、現在、滞在して日置市をいろいろ体感していただいているというところでございます。

情報発信ですが、日置市は毎日1つブログを上げようというスローガンで「ひおきと」というウェブメディアを展開しております。これは本当に細かいこと、ヤモリが家にいたよとか、いろいろなことが1日1記事上がってきている。これもデジタルの資産ということで積み重ねてきております。

我々は今、YouTubeで生配信をしているのですけれども、「ひおきとTV生放送」ということで、実はまた8月31日にございます。テーマは日置市は戦国島津の町なのだというので、1時間番組をしております。ぜひ御覧いただきたいと思います。このような形で、一応、甲冑を着てお送りする番組でございます。

ネオ日置でございます。コロナウイルスの中で、いろいろな方々から、なかなかふるさとに帰れないとか、ふるさとのあの神社に行きたいのだけれども行けないのだとか、いろいろな様々な声もお聞きしました。

その中で、Zoomとか、いろいろなもので写真を見せたりとか、交流もしてきましたが、それではなくて、そういう日置市にはいない方々の日置市のよりどころがインターネット上に何かできないかということで始まったのが、仮想空間メタバースにもう一つの日置をつくろうではないかというのが「ネオ日置計画」のメインの目的でございます。

このネオ日置計画は、冒頭に言いましたように、4万6000人の町であると、なかなか財源も乏しいということで、集められたお金でやれるだけのことをやろうではないかというのがポイントでございます。その代わりに、いろいろな方々の協力を得ながら空間を整備していこうやということで、NTTコノキューさんが提供しています「DOOR」さんをプラットフォームとしたメタバース上の空間づくりが始まるということでございます。

ただ、この取組に呼応していただいた第一プログレス様の「TURNS」という関係人口移住者の雑誌がございます。ここがいろいろ協力してくれるということで、これまで雑誌に2回ほどネオ日置計画を取り上げていただいております。

実際、どのような形でつくってきているかということで、現在はネオ日置のエントランス、入り口でございますが、そちらをつくっております。言えば、日置市を凝縮した地図上の空間に名所の看板が立っているという内容でございます。

スローガンは「すぐそこにある日本のふるさと」ということで「ネオ日置計画～日本は地方こそ面白い～」というスローガンを掲げて進めさせていただいているところでございます。

メタバース、インターネットですので、ネオ日置で得られる価値というのは、場所や時間にかかわらず日本の地方を体感できますよ。2つ目は、そこに住む人と交流ができますよ。リアルに体験できますよということで、3番は、2番と似たような形ですけれども、地方の魅力を楽しく体感できる。

この3つを柱としまして、来てもらう方々の集客イメージも、日本の地方に興味のある方々、それから、独特な文化圏「鹿児島」で、私も鹿児島弁のなまり、今、からいも標準語と言われる標準語をしゃべろうとしていますけれども、このような言葉をメタバース上で肌を感じていただきたい。あとは、日本に興味のある外国人の方々にかいま見ていただきたいなということでございます。

なので、鹿児島こそメタバースの威力を最大限発揮できるのではないかな。分からない言葉でしゃべられると「え？それは何ですか？」という交流のきっかけにもなりますので、

そのようなことが書いてございます。

そのようなことで、我々、まずは高齢者からいろいろ体験してもらおうということで、メタバースで野菜の実現販売とかができるかもねということで、このような体験会をいろいろさせていただいております。スマホでも手軽に入れるプラットフォームですので、主としては、今、オリーブの産地で実演販売をこのような形で、観光案内もメタバースを使って旅前の体験ができればいいなということで進めているところでございます。

ここからは、今年度に何をするのかというのを坊野さんに話をさせていただきたいと思えます。どうぞよろしく申し上げます。

○坊野氏 改めまして、LR株式会社の坊野と申します。私のほうから今年度の計画についてお話をさせていただきます。

まず、こちらにございますように、大きく3つの柱を考えております。1つ目が「市民への周知と体験」、2つ目が「空間づくり」、3つ目が「リアル世界との周遊性」ということで考えてございます。

まず、1つ目の「市民への周知と体験」ということですが、今、重水さんのほうからお話もございましたように、既に去年度から、主にVRゴーグルを使って「ネオ日置」というメタバース空間を体験していただくという体験会を実施しております。今年度はそれをさらに広めていくために、VRゴーグルの追加購入、また「ネオ日置」というメタバース空間の利用方法や操作方法を説明した冊子の作成と配布、あとは、より一般の方々にVRゴーグルを使っていただくために、VRゴーグルの貸し出しとか、「ネオ日置」の体験サービスを提供するリアル空間の開設も、今のところ、検討しております。

次の2つ目の柱の「空間づくり」ですが、こちら先ほど重水さんのほうからお話があったように、去年「ネオ日置」の入り口となるエントランス部分をつくったのですけれども、今年度に関しましては、さらにそれを広げる形で大きく4つほど新しい空間の作成を考えております。

まず、1つ目が、実際に物品等の売買ができるような商店街の空間、2つ目が、皆さんと参加してイベントを行うようなイベント空間、3つ目が日置市役所の窓口業務を担うような「ネオ日置支所」、そして、最後の4つ目が日置市内の名所を疑似的にメタバース上で体験いただけるような名所空間の作成を進めております。

名所空間に関しましては、こちらのプロジェクトの運営側だけではなくて、一般の方々にも参加いただいて、一緒にDIYという系式で制作を進めていこうということで計画をしております。

最後の3つ目の柱の「リアル世界との周遊性」というところですが、ただメタバースというオンラインの世界で終わるのではなくて、リアルの世界でも実際に日置市に足を運んでいただけるということで、今、いろいろと仕組みづくりをしまして、その1つが、こちらにございますアバターを制作・提供するようなサービスを日置市内でリアルの世界で提供して、それを実際に一般の方に制作いただいて、その後、またさらに「ネオ

日置」も体験していただくという循環のような、周遊性のあるような仕掛けも今年度はつくっていきたいと考えております。

以上が私のほうから今年度の計画ということになります。

○重水氏 今、時間は8分ぐらいですかね。「ネオ日置」に実際に入ってみたりしても大丈夫ですか。

○柴野教授 大丈夫です。どうぞお願いします。

○重水氏 それでは、ちょっと御覧いただきたいと思います。では「ネオ日置」に行くと。これは事前のアプリとかを入れる必要はなくて、URL、ブラウザですぐにさくっと入ることができるプラットフォームになっております。

ここへ来ました。重水憲朗となっております。

○柴野教授 すみません。画面がパワポのままになってしまっているのですが。

○重水氏 なるほど。ちょっと待ってください。今、どうでしょう。

○柴野教授 来ました。

○重水氏 よかった。すみません。失礼しました。

今、実際に見ていただいているのが「ネオ日置」でございます。最初にちょっと話をしましたが、日置市は、鹿児島県を代表する戦国島津の島津義弘公の銅像、これは実際に伊集院の駅前にあるのです。こちらのほうにぜひ再現していただいて、実際にDIYでつくったスペースがあるので、そちらのほうに行きます。妙見神社という神社を再現しておりますので、ちょっとそちらのほうに行きたいと思います。

このように、実際の県道37号線とか、そのようなものもしっかり入れておりますので、実際の旅前に、国道270号線があるではないか、この南に行けばこういう名所があるのだなということがどんどん分かってくるということでございます。

このようにいろいろ名所の看板があります。この看板は、現在1か所、空間としてできているのがこの妙見神社です。どのような展開をしていくのかというと、ここにまた移動します。ここに移動すると、空間を飛んで専用空間に移るということで、これは実際にある妙見神社です。

これは本当に巨石信仰も関係するような神社であるのですが、この岩が落ちそうで落ちない受験生たちに人気の岩なのですけれども、かつての戦国島津の武将たちもこの岩で戦勝祈願をして、九州制覇の一步手前まで行ったということもあるという空間になっております。これは、一応、今後、DIYでこのような空間をそれぞれでつくって行って、さらに、いろいろな周遊ができるようなところを増やしていこうというところでございます。

こうすると、またエントランスに戻ります。そのようなことです。

ちょっと時間を超過しましたね。よろしくお願いします。

○柴野教授 どうもありがとうございました。たくさん拍手やいいねが飛び交っていましたが、恐らく皆さんもいろいろなことを伺いたいのかなと思うのですが、その前に、今、御参加の方からお手が挙がっているのですけれども、これはウェビナーのために御発言いた

だくことができないのです。ですので、この運営に関してでも結構ですので、もし何か御質問がある場合は、Q&Aのほうに書き込んでいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

では、議論を続けていきたいと思いますが、今御紹介いただいたものも含めて、やはり新しい技術と地域アーカイブということが非常に大きなテーマになってくるかなと思うのですが、実際にそれを進めてこられる中で見えてきた成果であるとか、あるいはネックになってきたところとか、いろいろなことがあるかなと思うのですが、今の続きということで、まず、日置市の重水さんから、こうした大胆な取組に至る経緯も含めて、少しその辺りのことをお話いただければと思います。

○重水氏 説明の中でもありましたように、この新しい技術を使うというのは、日置市はすごく高齢化が高いので、議員さんとか、そのような方々もメタバースというのは何だという、そこからなのです。インターネットの可能性とかをまず伝えないといけないという部分もあって、トップの市長とも話をして、これは市のお金を使わないようにやっていきましょうということで、ある種、クラウドファンディングで賛同を得ながら進めてきているというのがこのプロジェクトでございます。

なので、クラウドファンディングとか、そういうものをしながら、あとはDIY体験会をしながら、少しずつ市民の理解、注目を集めながら今まで来ているというところで、今、進めてきている状況でございます。

○柴野教授 なるほど。そもそもメタバースを使おうという発想は、いつ頃、どの辺りから。やはりコロナというのは結構大きいきっかけになったのでしょうか。

○重水氏 そうですね。コロナがやはり最大のきっかけでございます。我々も関係人口の取組で日置市外の方々と交流しようということで、Zoomでいろいろしながら、あとはパワポを使って写真を見せたりとかがあったのですけれども、やはり平面的というか、そこに行ってみたいですよとか、そのような声等もあって、我々、関係人口で外の人とのつながりをどうしていこうかなというときに、LR株式会社さんからこれからのウェブ戦略としてメタバースを活用するのはどうでしょうかという御提案を頂いて、このプロジェクトがスタートしたというところでございます。

○柴野教授 そのコンセンサスを得るプロセスはすごく重要だったかと思うので、また後でその辺りも少し伺いたいと思います。ありがとうございます。

それでは、串間さん、先ほど御城下絵図のこともあったのですけれども、高精細Webギャラリーシステムというものを今回導入されてという展開でもあったので、もしよろしければウェブサイトで実際に共有していただいても結構ですので、その辺りの経緯を少し御説明いただけますでしょうか。

○串間氏 それでは、共有いたします。

○柴野教授 今、スライドが出ていますけれども、よろしいですか。

○串間氏 お待ちください。

○柴野教授 オーケーです。

○串間氏 今回、デジタルアーカイブを構築するに当たりましては、早い段階から3Dや高精細画像というコンテンツを設けることを検討しておりました。といいますのも、地域アーカイブとして多くの市民の方に利用していただくためには、デジタルアーカイブはデータベースであるというイメージが先行しているところがあると思いますので、まず、楽しく触れていただくためには、デジタルならではの目玉コンテンツが必要であると考えていたからでございます。

したがって、資料の選定につきましては、デジタルの効果を感じやすいものを選んでおります。こちらは3Dミュージアムでございますが、例えば、こういう動かすことができない重い大砲のようなものを3D化して、裏面が自由に見られるとか、砲身の中まで迫って見てみるなど、これらはデジタルでなければできないことですので、こういう資料を選んでおります。

これは戦国時代に中国から伝わった華南三彩という壺でございますが、これも展示をしていると1方向しか見られないわけでございますが、デジタルであれば、例えば、壺の中をのぞいて見ることで、中は色が茶色いのだなというのも自分で確認できますし、壺の底など、こういうところは展示されることはないと思うのですけれども、こういうところも確認できるということがございまして、資料を選んでいるというところでございます。

高精細画像コンテンツは「Gaze-On」というシステムでございますが、こちら実物は30メートルの長さがございますので、実物の場合は部分展示に限られるわけでございます。展示に合わせて一部のシーンを公開するというはやってきたわけでございますが、30メートルの長さを、これが全ての長さになるのですけれども、これだけのものを全体展示するというは不可能でございましたが、このように好きな場面を拡大して見ることができるということで、見せる展示というよりも、利用者が自ら見たいところを見て探すということが可能になってくるということで、新たな発見とか、気づきというものを利用者にご提供いただくことができるのではないかと考えておるところでございます。

活用事例はまだこれからなのでございますが、今後は実物の展示と連動させることや、小・中学校での調べ学習の教材として活用したいと思っているところでございます。

以上でございます。

○柴野教授 ありがとうございます。

これを実際に制作される期間というのは、先ほどから期間のことばかり伺っていますけれども、どんな感じだったのでしょうか。

○串間氏 事業が始まって、年度の後半、撮影自体は数日で終わったのですけれども、その後の合成作業などを含めて半年ぐらいかないと思います。50枚程度の写真をつなげているような形になります。

○柴野教授 そこに実際に関わった方というのは、もちろん技術者の方と事業者の方というか、これをおつくりになった方とスタッフの方という、専門的な知見もそこに加えなが

ら、そごがないようにという形で進めてこられたと。

○串間氏 そうですね。そうでございます。

○柴野教授 ありがとうございます。これはもう最初から、やるしかないということで合意は結構取りやすかったのでしょうか。

○串間氏 そうですね。デジタルアーカイブの価値を、これは市民だけではなくて、実は内部的にもこういうことができるようになるよということが分かりやすいということで、やはり3Dとか高精細というところで、実物ではできないことができるというところをアピールするために、早い段階から構想しておりました。

○柴野教授 これはコロナのときというか、オープンしてからアクセスが大変増えているというお話だったのですけれども、この存在自体は市民の中には浸透していたものなのですか。

○串間氏 そうですね。この御城下絵図は特に展示もよくされておりまして、いろいろなところで画像が利用されたりもしておりますので、市民誰もが知るということではないですけれども、知る人は知っているような資料でございます。

○柴野教授 なるほど。それをこういう形で見ることができるということで、非常にインパクトがあったということですね。

○串間氏 はい。

○柴野教授 どうもありがとうございます。

では、吉成さんの場合はいろいろな側面でいろいろな技術を使っていっしょるので、少しアプローチが違うのかなと思うのですけれども、事業を運営されるという立場でその辺りのことを少し教えていただければと思います。

○吉成氏 こういう市民の複合文化施設でありますので、一言で言うと、これはまちづくりとか、いろいろな領域で言われている言葉ですけれども、やはりよそごとになってはいけない。よそごとからどうやって市民の皆さんが自分ごとになっていくようなプロセスデザインができるのかというのが底にある一番大きな考え方です。

歴史をひもとく場合もそうなのですが、歴史愛好家の方々とか、研究者の方々はもちろんですけれども、そこから普通の人たちにどうやって開いていって、自分ごととしてまちの一端を担う大人も子供も関わっていきますので、それをどうやって動かせるのかということに情報が使えるのかと考えていきましたので、そういう意味では、いきなりデジタルから入るというよりは、リアルのほうから入っているわけです。

リアルのほうから、本の肌ざわりとか、人の関係の仕方とか、その中から語られるヒストリーとか、情報とか、そういうぬくもりのあるようなものを、デジタルの技術も使いながらどのように広められるのかというのが私たちの大もとの考え方なので、ここは特に中心市街地の中にある大きな施設ですので、QRコードで自分だけのマップをつくって、それを持ってすぐにウォーカブルに実際に町の中へ出て行く。それを促していくようなツールとしてつくっていますので、ちょっと今日はお見せできなかったですけれども、その操

作性とかが一番大事なところかなと考えながらやっています。

○柴野教授 もしお見せいただけるのであれば、映していただいても結構なのですが、やはり普通の方が気軽に撮ったり集めたりして、それをどこかに集めるというインターフェースはすごく大事ですよ。

○吉成氏 そうですね。そのインターフェースが非常に触れやすいものであり、かつ、古地図などもそうなのですが、子供たちは今は当たり前のようにパッドを持っているので、かなりさくさくといろいろな角度から見られるというのは大切です。先ほど言い忘れましたけれども、私たちの小さなシビックプライドプレイスに年間で大体3万5000人ぐらいの人たちが出入りしていますので、相当な数です。館に来る全体の人たちは120万人ぐらいなのですけれども、そのうちの3万5000人はこれに触れて帰りますので、博物館、美術館や図書館へとつなぐ、本当に私たちはそのための起点になる入り口としてどういう開き方ができるのかというデザインの仕方をしています。

○柴野教授 今御紹介していただいている中で、先ほどまちライブラリーのお話がありましたが、これは磯井さんがやっていたらまちライブラリーのあれを利用しながらやっていたらと思うのですけれども、そういう既存のものも利用しながら、そして、これを市民が自発的に自分ごととして始めたというのはどういう経緯なのですか。

○吉成氏 これはメディアコスモスの近くの若い旦那さんというか、商店主さんたちが僕のところに2年目か何かに相談に来られて、メディアコスモスは120万人来ているのに、うちのほうには誰も来ないので、何かいい方法はないだろうかとおっしゃられて、毎月、夜ここに集まってみんなで相談会をやったのですが、その中から、小さいけれども、自分たちもメディアコスモスに負けないような場所をつくってやっていきますという話になったので、だから、そういう意味では、名所がどんどん増えていくわけですよ。

回遊性が高まっていきますし、そういう情報も今回のシビックプライドプレイスとも連動しています。実際に編集講座に来ている人たちは、今度、初めてOBたちが自分たちのZINEをつくって、うまくいけば、自分たちのメディアコスモスに関わった人たちのシビックプライドの冊子が今月末に第1号が出るのですが、そういうものも自発的に、これは私たちも関係しながらですけれども、私たちからもう離れたような状態で始まっていきますので、それをできる限り増やしたいというのが岐阜市の考え方です。

○柴野教授 なるほど。でも、そうした人たちのいろいろな営みを受け止める行政側の主体というの必要なわけですよ。

○吉成氏 そうですね。要ります。

○柴野教授 そのスタッフというのは、どういう形で配置されているのでしょうか。

○吉成氏 みんな、事務職ですから、やったことがなかったわけです。特に専門性があつたわけでもないですし、メディアコスモスの中で事業に関わった人たちが、先ほどの地図をつくる時に、岐阜の魅力マップみたいなもので、みんなで手分けして、自転車に乗しながらデジカメを担いで大体200か所ぐらいにインタビューに行って、信頼関係をつくっ

て情報も出させてくださいみたいなことも、1年から2年ぐらいかけて、今もそうだけれども、集中的にやりました。自転車のペダルをこぎながらいろいろな人たちを回することで、彼らが身に着けた編集技術だったり、それから、人とコミュニケーションする力みたいなものがあります。

地域のいわゆるデジタル人材の育成をしなければいけないと思っているのですが、デジタル人材というのはコミュニケーターで、人と情報を結び合うということの中間にいる人間なので、そういう人たちを育成といっても、何か講座をやって育成できましたなんて簡単にはできないので、汗もかきながら、手も足も動かしながら、かなり泥臭いところですけども、それをやっていく中で、職員の中でも若い人たちが大分育ってきたというのが今ですかね。

○柴野教授 なるほど。スタッフは何人ぐらいいらっしゃるのでしょうか。

○吉成氏 このメディアコスモス事業課には6人です。私以外に5人いまして、あと、それ以外に図書館のほうの職員が、ほとんど司書ですけども、70人を超える人たちがいますので、そこが手分けしながらやっているという感じですね。

○柴野教授 ありがとうございます。

お時間も既に半分を越してしまっているのですが、これから2つ目の議論に入っていきたいと思うのですが、地域の価値を高めていくために皆さんが地域アーカイブというものに取り組んでこられる中で、実際にはデジタルアーカイブというのは、総論賛成、各論反対みたいなところがあるかと思うのです。やはりお金がかかるということが重要ですし、今、吉成さんからお話があったとおり、人を育てるということもすごく大きな障壁になっているかと思うのですが、そういうことを各自治体、あるいは地域の中で取り組まれていく中で、どういうところがネックになったのか、あるいはブレイクスルーになったのかという辺りを少しお聞かせいただきたいと思うのですが、今の続きで吉成さんのほうからお話を伺ってもよろしいでしょうか。

○吉成氏 ブレイクスルーになったのは、やはり先ほど申し上げた私どもの市長がシビックプライドを全ての政策基盤に置くというお話を全庁的にもしていますので、それが非常に大きかったです。今までやってきたことも、これもシビックプライドではないか、これもシビックプライドではないかともう一回くり直しができたのです。

私が先ほどスライドで出した「シビックプライドとは」という言葉は全庁的に使っている言葉で、メディアコスモスが始めたことが全庁にも広がっていますので、そういう意味で、首長がオーケーを出したということで弾みがつきました。その後からシビックプライドプレイスというのは生まれています。もちろん、それまでにやってきた「おとなの夜学」の実践とか、「シビックプライドライブラリー」とかあるのですけれども、そこがうまく結びついてくれたというのはあります。

○柴野教授 なるほど。それはもう議会の支持も得られたということですね。

○吉成氏 そうですね。ありがたいことに。

○柴野教授 ありがとうございます。

重水さん、日置市の場合はいかがでしょう。

○重水氏 今お話を聞いておまして、先ほど少し話をさせていただきましたが、基本的にこんなに財源が厳しい中で新しいものをする必要はあるのかから絶対に入るの、やはり資金を集める、イコール、支持を集める。その見える化というのがクラウドファンディングだったというところでございます。

昨年度は660万円から集めまして、今つくっている部分については、NTTさんの協力も結構もらいながら、330万円をかけてつくっております。今年度はまたガバメントクラウドファンディングをさせていただいております、一応、2600万円の資金を集めております。返礼品があったので、全部を使えるわけではないのですけれども、そのようなことで資金調達という部分で支持を集める。日置市の議会、市民はそのような形で一定の理解をしてくださっているということでございます。

○柴野教授 クラウドファンディングで実際にお金を出した方というのは、どういう方かというのは把握されているのですか。

○重水氏 その方々がどうかというところまでのピックアップはできていないのですが、寄附に併せていろいろコメントが入るのですけれども、日置市出身の方だったり、インターネット上に私が小さい頃に行っていた神社ができるのを考えるとわくわくしますという御意見等を結構頂いております。

○柴野教授 ちなみに、このファンドへのフィードバックというのは、どんなことがあるのでしょうか。

○重水氏 フィードバックというか、実は今日のプレゼンの最後にあったのですが、そのときには日置市のイメージキャラクターの「ひお吉」君の-avatarを皆さんにプレゼントしますよということで、合わせて60~70人ぐらいの-avatar、そのようなものも入れながら、あとは、今、5月中旬に実際に「ネオ日置」をリリースしまして、これまで数字が入っているのは2,800人ぐらいです。なので、これからどんどん活用していただきながら、どんどん名所ができてくるので、盛り上がりこれからつくっていききたいというところがあります。

○柴野教授 ありがとうございます。

実はお金の件は御質問の中にも出てきて、皆さんに御質問ですということで、今後の運用、あるいは年間予算はどのぐらいなのか、差し支えなかったら教えてくださいというお話もあるのですけれども、もし可能であれば、日置市さんから。

○重水氏 まさに我々はこれを持続可能な制度として進めていかなければならないということで、実は説明をしましたVRゴーグルの貸し出しとかは、正直なところ、これは有料で市民に対しても貸し出しますということで設定しております。あとは、商店街の出店、それから、最初から手数料というのはそんなに取れるところではないのかなとは思いますが、そのような形で自主財源、人の往来が多くなってくると、広告料とかも頂ける

のかなというところもありますので、そのような形で財源確保をしながら、一応はこのプラットフォームは無料で使えるプラットフォームですので、プラットフォーム自体でお金が必要だということではございません。

以上です。

○柴野教授 あるものを上手に利用されたということですね。

○重水氏 はい。

○柴野教授 ありがとうございます。

それでは、串間さん、いかがでしょうか。今の件なのですが、費用のことで助成金を申請していらっしゃると思うのですが、ここではDXというのが一つのポイントになっているのでしょうか。

○串間氏 そうですね。大分市の場合は歴史資料館と美術館でもともと収蔵品管理用のデータベースというのは持っていたのですが、そのクラウド化というところで課題がずっとありまして、図書館でも電子図書館の公開というのを目指していたのですが、いずれもやはり、単独で予算化というのは厳しい状況があったわけでございます。

それで、視点を変えまして、大分市全体の地域活性化などの行政課題を解決するための手段として、これまでの文化的活動をDX、デジタルトランスフォーメーションしますよという観点からデジタルアーカイブを説明することによりまして、事業化できたのではないかと考えております。

そのために、当初からより多くの市民に活用してもらえるデジタルアーカイブの構築を目指しておりまして、資料のオープンデータ化というのもこの考え方によるものでございます。

○柴野教授 なるほど。つまり、その中で各地域のアーカイブ機関との連携というか、そういうところも非常に重要になってきたのかなと思うのですが。

○串間氏 うちの場合は、連携しているのは市内の3館と文化財課というところでございますけれども、やはりデジタルアーカイブに対する温度差がありますので、定期的に会議を行ったりして、理念の共通化を行いながら実現していったという経緯でございます。

○柴野教授 なるほど。市政全体のDX化という一つの枠組みの中で、このことをうまく進めてこられたということですね。

○串間氏 はい。

○柴野教授 ありがとうございます。費用の点はちょっとあれですか。

○串間氏 ランニングコストとしましては、年間100万円弱ぐらいは積み上げているのですが、新規コンテンツの追加というところは、また改めて補助金などを申請しながら獲得していこうかなと考えているところでございます。

○柴野教授 ありがとうございます。

吉成さん、先ほどの費用の件なのですが、いかがでしょう。

○吉成氏 シビックプライドプレイスを1年前にオープンさせているのですが、そ

れにかかった費用はシステム開発とかも全部を含めて2000万円ぐらいかかっています。その中で半分近くは地方創生の交付金を頂いていますので、そちらからのお金もその中に入っています。

お金に関しては、ランニングコストとしては、今は全然かかっていなくて、システムの保守点検に数十万円ぐらいのお金が出ていっているという感じでしょうか。

○柴野教授 ありがとうございます。

実は予定の時間があっという間に来てしまったので、もっと本当はたくさん伺いたいこともあるのですが、この場ではQ&Aの御質問全部にお答えできないかなと思います。後でそれぞれの皆さんに御回答いただきまして、ホームページのほうでフィードバックをさせていただきたいと思いますので、御了承ください。

それでは、最後になりますが、今回のパネルに御参加いただく中で、改めて地域振興の中でのデジタルアーカイブにまつわる活動というところで、言い残されたこと、最後に言っておきたいということがあれば、一言ずつお願いしたいと思います。

では、吉成さんからお願いいたします。

○吉成氏 やはりまだ始まったばかりで道半ばですので、見える化というものをどのように進めていくのかといったときに、メディアコスモスの中には岐阜を代表するようなコミュニケーションポイントという形でシビックプライドプレイスをつくることができましたけれども、本当はほかの場所にも幾つも入れたいわけです。私見ですが、本当に岐阜城の上から長良川を見ながら、そこに実際にポータルな機材が入れば、そこで岐阜の情報も得られるとか、柳ヶ瀬の商店街のコミュニケーションスペースの中にそういうものがあるとか、そういう複層化させるということはまだこれからの話になりますので、将来的にそれをどう進めるかということも考えていますということだけ申し伝えておきます。

○柴野教授 どうもありがとうございました。

では、串間さん、いかがでしょうか。今後の聞き取りというか、オーラルヒストリーみたいなことも含めて、御質問が来ているので、もしよろしかったら、その辺にも触れていただければと思います。

○串間氏 デジタルアーカイブの維持管理とか、これからの事業継続ということに関しては、継続的に予算措置が必要となるわけですが、そのためには市民から必要とされるデジタルアーカイブになることが前提ではないかと思っています。逆に言えば、市民に必要とされなければ予算をつけてもらえないというのが現実でございまして、まず、デジタルアーカイブの存在を市民の方に知ってもらって、触れてもらって、利用してもらおう取組を地道に続けていくことによって、利用者の裾野を広げていきたいと考えております。そのためにも、今後は、オーラルヒストリーや、3Dの追加も考えておりますので、コンテンツの継続的な更新を進めていきたいと考えております。

そうすることで、我々がこういう活用をしてくださいと言うのではなくて、思いもよらないような活用が利用者のほうから自然になされるようになって、地域活性化に結びつい

ていくのではないかなと思っていますところでございます。

○柴野教授 どうもありがとうございました。

それでは、重水さん、お願いいたします。

○重水氏 日置市のこの取組でございますが、この根っこの部分は、日置市から始まる戦国時代の島津家の歴史的プライドが根底にはございます。鹿児島では神様とも言われている島津日新斎忠良、日新公という方が武士の教育のために残した「いろは歌」というものがあります。この「いの歌」が「いにしへの道を聞いても唱へても わが行ひにせずばかひなし」と。幾ら新しいことを幾らすごい教授から教わっても、自分でしなければ何もならんよという教えがございます。これをまさに実行に移しているのが、今、このプロジェクトであります。

そのようなチャレンジ精神もりもりの日置市と少しでも関わっていただいて、いろいろこの挑戦にぜひ御協力いただいたり、もちろんマンパワーですね、DIYイベントとか、関東とか、そのようなところに出向いてのワークショップだったり、いろいろなことをこれからしていこうと思っております。ですので、ぜひひおきカメカメ団という日置市公式ファンクラブに登録していただいて、我々と少しでもつながりをつくっていただけたらうれしいなと思っております。

日置市からは以上でございます。よろしく申し上げます。

○柴野教授 どうもありがとうございました。

本日は本当に時間が足りなくて、あと1時間ぐらい必要だったかなと思うのですけれども、それぞれの立場、目的、取組内容について、非常に刺激的な御紹介をいただいたと思います。

本日、お話を聞いていて改めて思いましたのは、デジタルというのは、当然、デジタルが目的なわけではないわけですが、デジタル化ということを契機に地域のリアルが立ち上がっていくのだなということを改めて感じました。

それは実は私たちが忘れかけているものであって、もともとよく知らなかった歴史だけではなくて、実は経験していたはずの日常でもあるのではないかな。それを改めてここで拾っていく作業の中で、地域、そして、そこに関わってくる方々の人生そのものが再構築されていくというか、そのような印象を受けました。これが実はまさにアーカイブの本質であって、そこには必ず人が関わっていくというプロセスが重要なのかなと思います。

それから、もう一つ、地域のデジタルアーカイブというのは、やはりそれぞれの特性や事情によって進められるものなので、人やお金の資源が限られて、さらに、時間的な制約もある中で、全てを誰かが担うということは難しいわけですね。だからこそ、リソースをほかに頼るといいますか、市民の参加であったり、地域の中、あるいは地域の外のプレーヤーと交流したり、そこでいろいろな知見などもシェアしていくということが肝になってくると思います。そういうことを続けていく中で、アーカイブ自体はどんどん変態していけばいいと思うのですけれども、先に続いていくようなものが構築されるということ

感じました。

ジャパンサーチもまさにそういったプラットフォームを目指しているわけですが、そこではデジタル技術の活用ということもポイントになると思いますし、逆に言えば、つくったものをどのように可視化していくか、あるいは日常に落とし込んでいくかということ、これが課題の一つであると思います。

本日午後のセッションでもまた様々な事例の御紹介があるようですが、このパネルが地域アーカイブの可能性を考える上で何か一つヒントになればと思います。

改めまして、本日御登壇いただいた皆様、そして、御参加いただいた皆様、どうもありがとうございました。

それでは、司会のほうにお返ししたいと思います。

○司会（高津） ありがとうございます。想定した時間では足りないぐらい深掘りしていただきまして、ありがとうございます。

また、知りたいのだけでも、なかなか聞きづらいお話もしていただきまして、本当にありがとうございます。今日、聞いていらっしゃる方が、今後のアーカイブ活動と地域振興との連携のヒントになったのではないかなと思っております。

柴野先生、吉成様、串間様、重水様、本当にありがとうございました。

第Ⅰ部のパネルディスカッションは以上となります。ありがとうございます。

質問が残っておりますので、後日、ホームページのほうに掲載をさせていただきます。よろしく願いいたします。

それでは、午前中のもう一つのプログラムのほうに移りたいと思います。「デジタルアーカイブジャパン・アワード2023」の表彰を行いたいと思います。

表彰式の進行は、今回、デジタルアーカイブジャパン・アワード選考委員会の委員長をお務めいただきました、実務者検討委員会の高野座長をお願いしたいと思います。

それでは、よろしく願いいたします。

（２）デジタルアーカイブジャパン・アワード2023 表彰

○高野座長 それでは、デジタルアーカイブジャパン・アワードの表彰に移りたいと思います。

この賞は昨年創設されまして、今年で2回目になります。その目的は、デジタルアーカイブジャパン推進委員会等を中心として進めています、デジタルアーカイブを社会の中に根づかせていくという活動に対して、いろいろ御活躍いただいている方々を評価して、表彰させていただくことを通じて、中央でやることだけではない、本当の意味でのステークホルダーの方々をどうやって活動しやすくしていくのかというのが目的であります。

昨年はこの実務者検討委員会の構成員だけで審査を行ったのですが、2回目の今回はそこに民間の有識者の方にも加わっていただきまして、昨年度よりは多様な視点で審

査を行いました。

審査に当たって重要な柱と考えましたのは次の5つです。オープン化の推進、つなぎ役としての貢献、利活用の促進、地域情報の発信、その他貢献という5つの軸でそれぞれの活動を評価させていただいて、6つの受賞者を決定させていただきました。

今日はオンラインですので、受賞者の皆さんに1か所に集まっていただく、あるいは手渡しするということはできないのですが、賞状とトロフィーを用意しておりますので、後日、郵送させていただく予定になっています。

それでは、ここから受賞者を御紹介いたします。

今年度は6件です。

まず、1つ目の受賞者は、北海道庁の「北海道デジタルミュージアム」です。

受賞理由を御紹介させていただきます。

北海道内のアーカイブ機関のつなぎ役として、小規模な郷土資料館等を含む80以上の機関をジャパンサーチとつなぎ、道内の多様な資料・作品を集約して発信しておられます。ジャパンサーチと連携するコンテンツの約半数はオープンな二次利用条件（CC0またはCC BY）で提供しています。また、地域のミュージアムや所蔵資料の特徴を俯瞰できるように、インターフェースのデザインなども工夫されておられます。こうした地域のつなぎ役としての取組を高く評価いたしました。

それでは、北海道環境生活部文化局長、塚田みゆき様より受賞のコメントをお願いいたします。

○塚田氏 ただいま御紹介いただきました北海道環境生活部文化局長の塚田でございます。

北海道として受賞ということでございますが、知事の出席がかないませんでしたので、知事から預かっております受賞コメントを代読させていただきます。

このたび、北海道デジタルミュージアムが受賞の栄誉を賜りましたことを大変うれしく思います。道内に多数ある博物館や美術館などの魅力を凝縮した北海道の知の入り口として、今回の受賞を契機により多くの方々が訪れ、そして、実際に各施設へと足を運んでいただけるよう、掲載施設を拡大するなど、さらなる内容の充実に取り組んでまいります。今後とも北海道デジタルミュージアムに御注目いただきますようお願いいたします。

北海道知事、鈴木直道。

知事からの受賞コメントは以上でございます。

私どもの北海道デジタルミュージアムは、御案内のとおり、北海道は広大で多数の博物館などが点在しておりますことから、こうした施設の皆様の御理解と御協力の下、施設情報などを包括的に発信しているところでございまして、現在、126施設、約2,500件の収蔵品の情報を掲載しております。

ジャパンサーチとの連携により国内外への発信力の強化につながっているものと考えており、内閣府や国立国会図書館をはじめ、運営に関わる皆様にこの場をお借りして感謝を申し上げます。

北海道といたしましては、今後とも連携施設の拡大など、さらなる内容の充実に取り組んでまいります。

本日は誠にありがとうございました。

○高野座長 ありがとうございました。

それでは、2件目に移らせていただきます。

2つ目の受賞者は、縄文遺跡群世界遺産本部の「JOMON ARCHIVES」です。

受賞理由は、今表示されておりますが、複数の自治体にまたがる世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の情報を一元的に保存し、ツーリズム等での活用を意識した公開に取り組んでおられます。また、ジャパンサーチと連携するコンテンツの9割以上をオープンな二次利用条件（CC BY）で提供されています。こうした複数の自治体をつなぎ、特色あるコンテンツを整理・発信している点を高く評価いたしました。

それでは、受賞者を代表しまして、縄文遺跡群世界遺産協議会会長の岡田康博様より受賞のコメントを頂きます。よろしくお祈いします。

○岡田氏 ただいま紹介いただきました協議会の会長をしております岡田と申します。

このたびは世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」のデジタルアーカイブであります「JOMON ARCHIVES」が受賞の栄誉を賜り、大変光栄に存じます。

当アーカイブは関係する4道県、14市町の保有するデジタルコンテンツを1か所に集約し、誰もが自由に利用しやすいように公開することに努めてまいりました。おかげさまで多くの皆さんに御利用いただいていると感じております。今回の受賞を機に今後もさらにコンテンツを充実させ、より多くの方に親しみを持って使っていただけるよう、さらに情報発信に努めてまいりたいと感じております。

本日はどうもありがとうございました。

○高野座長 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、3件目の受賞者を御紹介いたします。

3件目は、新潟大学地域映像アーカイブ研究センターの「にいがた地域映像アーカイブデータベース」です。

こちらは非常に歴史のあるデータベースなのですが、歴史的・民俗的に意義のある地域資料を長期にわたって収集し、地域教育に活用してこられました。利用に制限がある程度あるのですけれども、豊富な地域資料をジャパンサーチでは自由に閲覧できるように工夫していただいています。収録資料は、地域教育のほか、展示会やフォーラム等でも活用されています。こうした地域資料の収集に関する息の長い取組や、地域に根差した活用の取組を高く評価いたしました。

それでは、受賞者を代表して、新潟大学人文社会科学系地域映像アーカイブ研究センター代表であり、人文学部の教授、また、創生学部学部長でもあられます中村隆志様より受賞のコメントを頂きます。よろしくお祈いします。

○中村氏 よろしくお祈いいたします。ただいま御紹介に預かりました、新潟地域映像ア

ーカイブ研究センターの中村隆志でございます。また、新潟大学では人文社会科学系地域映像アーカイブ研究センター代表もしております。

このたびはデジタルアーカイブジャパン・アワード受賞の榮譽に浴し、大変光栄に存じます。

にいがた地域映像アーカイブデータベースは、新潟地域の生活の中にある映像を発掘し、デジタル化するだけでなく、その内容を整理・分析し、新たな社会の文化遺産として映像をよみがえらせるべく作業を行ってきた映像を集積したものです。

この取組を始めて既に15年以上たっておりますけれども、始めた当時は何もないところからでございます。それがこうしてデジタルアーカイブジャパン・アワードに活動を認められて、非常に感無量でございます。今後も教育研究をはじめ、広く活用していただけるよう、取組を続けていきたいと考えております。

本日はどうもありがとうございました。

○高野座長 どうもありがとうございました。

次に、4件目の受賞者です。慶應義塾ミュージアム・コモنزの「Keio Object Hub」です。

慶應義塾大学は、1990年代に創設された貴重書のデジタルアーカイブ、これはデジタルアーカイブの走りのようなプロジェクトでしたけれども、「HUMI」というプロジェクトがありました。これらをはじめ、所蔵資料のデジタル化とそれらの公開・活用に関する取組を継続的に実施してこられました。

こうしてデジタルアーカイブを含む学内の多様な学術資料を集約した「Keio Object Hub」は、同大学のデジタルアーカイブに関する取組の中核として、長期的な視点で資料を保存・提供する役割を果たしています。

また、5,000点以上のコンテンツに豊富なメタデータを付与し、オープンな二次利用条件（CC BY）で提供されています。こうした長期間の継続的なデジタルアーカイブ活動を高く評価して、受賞につながりました。

それでは、慶應義塾ミュージアム・コモنز機構長の池谷のぞみ様より受賞のコメントを頂きます。よろしく申し上げます。

○池谷氏 よろしく申し上げます。

このたびは、慶應義塾の長年にわたるデジタルアーカイブに関わる取組に対して、栄えある賞を頂き、感謝いたします。大学長を兼ねる慶應義塾の伊藤公平塾長よりメッセージを預かっておりますので、代読させていただきます。

慶應義塾大学では、1990年代、デジタルアーカイブの黎明期より学術資料のデジタル化に関する研究と実践に先導的に取り組んできました。「HUMIプロジェクト」が先鞭をつけた貴重書に始まり、現在では慶應義塾ミュージアム・コモنزを中核として、小学校に始まる一貫教育校から大学まで、文理を問わず多様な専門領域で取組を展開しています。

「Keio Object Hub」は、これら義塾全体の活動によって生み出されたデジタル学術資源

を集約し、公開・活用していく基盤であり、イニシアチブです。大学は社会からの信頼と付託の下、様々な科学的・文化的資源を蓄積し、学術研究や教育に活用しています。その資源と活動の成果を社会に対して長期的な視野を持って共有していくことは、大学の大きな責務です。

デジタル化が進展する現代においては、そのような活動をデジタルプラットフォーム上でも実現することが求められています。このたびの受賞を励みとして、今後も現代の、そして、未来社会の一員としてデジタルアーカイビング活動の推進に励んでまいります。

本日は誠にありがとうございました。

○高野座長 どうもありがとうございました。

それでは、5件目に移ります。

次は国立教育政策研究所教育図書館の「教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ」ほか3件の受賞です。

教育研究に資するデジタルアーカイブとしての完成度は高く、また、ジャパンサーチと連携するコンテンツの半分以上をパブリックドメインマークで提供しています。古い教科書とかをデジタル発信されています。

さらに、ジャパンサーチのギャラリー機能を活用して、現物資料の展示と連動したオンライン展覧会を開催するほか、貴重資料デジタルコレクションでは、ジャパンサーチの簡易IIIF機能を用いてユーザーが活用しやすいデータ形式で公開しており、特色あるコンテンツを効果的に発信しておられます。

小規模なアーカイブ機関の実践例として、こうしたデジタルコンテンツのオープン化や利活用促進の積極的な取組を高く評価いたしました。

それでは、受賞者を代表しまして、国立教育政策研究所研究企画開発部教育研究情報推進室総括研究官の江草由佳様より御挨拶いただきます。

○江草氏 このたびは名誉ある賞を承り、感謝申し上げます。

国立教育政策研究所教育図書館では、従来使用している図書館システムを活用したり、システムを使わずに静的なファイルだけを使って公開できるようにするなど、小規模図書館でも実現可能で、利便性を大きく損なわず、維持・移行がしやすいデジタルアーカイブ構築にこれまで取り組んできました。また、より広く活用いただけるように、ジャパンサーチのギャラリー機能や簡易IIIF機能も導入しました。

こうした取組を高く評価いただきましたこと、誠に光栄に存じます。これからも広く自由に使えるアーカイブを目指して、さらなる充実を図っていきたく思っております。

本日はありがとうございました。

○高野座長 ありがとうございました。

それでは、最後になりましたけれども、6件目の受賞者を御紹介いたします。東京富士美術館「東京富士美術館収蔵品データベース」です。

ジャパンサーチと連携するコンテンツの全てがCC0のオープンなデータとして提供され

ています。日本のミュージアムとしては、多分、現在はここが唯一かもしれません。ジャパンサーチのギャラリー機能を使ったオンライン展覧会を多数作成したり、ジャパンサーチのAPIを活用したデジタルキャプションを展示室へ設置し、収蔵品データベースの更新と連動させたりするなど、外部への情報発信とともに、館内業務の効率化等にジャパンサーチの機能を積極的に活用していただいています。

こうしたデジタルコンテンツの活用に向けたオープン化の取組や、デジタル技術を活用した意欲的な取組を高く評価しました。

それでは、公益財団法人東京富士美術館館長の五木田聡様より御挨拶いただきます。

○五木田氏 ただいま御紹介いただきました東京富士美術館の五木田です。

このたびは名誉あるアワードを受賞することができ、大変光栄に存じます。

初めに、このたびの受賞は、日頃より当館を御支援いただいている皆様の御助力があってこそと、心から感謝申し上げます。

現在、当館の所蔵作品情報はジャパンサーチ上で2,047件が公開されており、そのうちホームページに掲載している作品画像については、ジャパンサーチへの参加をきっかけに、著作権が満了している1,622件について、どなたでも自由に御利用いただけるようにCC0での提供を始めました。

オンライン展覧会については、今から1年前、過去に開催した所蔵作品による企画展をオンライン展覧会として8件リリースしました。それまでジャパンサーチ上の当館基幹ページへのアクセス数は月間数十アクセス程度でしたが、この間、オンライン展覧会のポスターの掲出や新聞報道などを通じて広報活動を展開、2022年9月に4万4616アクセスに急増し、その後も現在までコンスタントに月間数千アクセスを維持するようになりました。

さらに、昨年4月より8月まで株式会社CREiST、株式会社ミライト・ワンと協働し、デジタルキャプションの実証実験に取り組みました。ジャパンサーチのAPIを利用して、展示室のキャプションが半自動的に最新の情報に更新されるという取組で、デジタルキャプションを展示室の作品とデジタルアーカイブとを接続するツールとして活用する試みでありました。

今後もジャパンサーチを単なる作品情報の提供先としてではなく、むしろ所蔵品の情報をさらに活用するための場、プラットフォームとして積極的に関わっていきたくと考えています。

このたびは誠にありがとうございました。

○高野座長 五木田館長、ありがとうございました。

以上で受賞者の紹介及び受賞者からのコメントの紹介を終えたいと思います。

今回の選考を振り返って少しコメントしたいと思うのですが、ジャパンサーチの母体となっているデジタルアーカイブジャパン推進委員会というのが内閣府にあります。その下に実務者検討委員会というのがありまして、私はそこに関わっている者です。

ジャパンサーチというのは、こういう国のプロジェクトでどういうことをしたらいいか

という検討をするだけにとどまるのではなくて、実際に利用できる仕掛けをつくろうというところが少し異なっている我々の心意気だったわけです。それが3年前にジャパンサーチとして一般公開にたどり着きまして、3年前の8月25日というのが正式公開の記念日なわけです。その日を思い出す意味も含めて、去年からこのイベント「デジタルアーカイブフェス」というのを開催するといいたしました。

今回のデジタルアーカイブジャパン・アワードというのも、それに併設するような形で検討いたしまして、広く実践者、もちろん内閣府の管轄といいますか、目をかけたり、予算措置に影響を及ぼしている範囲を超えてこういう気運が高まらない限り、僕たちが目指している本当の意味でデジタルアーカイブが社会に根づくということは実現できないものですから、その実態的な担い手の方々にここに集まっていただいたり、議論していただいたり、あるいはグッドプラクティスといいますか、ほかの組織にとっての参考になるようなものを表彰することによって、皆さんにそれを参考にさせていただく。あるいはそれをスポンサーしている自治体なり、大学なりがそういう活動についての理解を深めていただくというのを目標にして、このようなイベント及びアワードを展開しております。

ですので、今回の受賞者は6件ありますが、最初の2つは地方自治体を中心とした取組、3番目、4番目は大学の中での活動として育ってきたもの、5番目が国立の機関、6番目が民間の取組ということで、属性も非常に多岐にわたるように選考委員会では工夫していただいて、今回の6件の選考に至ったという次第です。

もちろんデジタルアーカイブ、ジャパンサーチに貢献いただいている、データを連携していただいている組織だけでも物すごい数になりますし、データベースという単位で数えますと数百以上になるわけですが、その中から6件を選ぶということは非常に大変な作業で、ぜひ選びたいというところがほかにもいっぱいあるわけです。

ですが、こういう活動というのは、継続していくことが非常に重要だろうということで、毎年5～6件の方々にこうやってスポットライトを浴びていただいて、皆さんにそれを紹介していただく。もちろん有名な方々が多いので、もう知っているよということもあるかと思うのですが、これまで気づかなかったような人たちにも、そういう存在に気づいていただく機会になればということでやっております。

特に問題がなければ、多分、来年以降も続けていただけるのではないかと期待しているところですが、今回、このジャパンアワードを選ぶに当たっての総評とさせていただきます。

以上で紹介を終えたいと思います。よろしく申し上げます。

○司会（高津） 高野座長、受賞者の皆様、ありがとうございました。

以上をもちまして第Ⅰ部を終了とさせていただきます。

それでは、ここで休憩時間とさせていただきますして、第Ⅱ部「地域におけるデジタルアーカイブの構築・連携等」は、13時30分から開始させていただく予定でございます。

それでは、しばらくの間、失礼させていただきます。

(休 憩)

<第Ⅱ部 地域におけるデジタルアーカイブの構築・連携等

(3) ジャパンサーチとの連携について(概要と連携方法等)

○司会(奥村) 定刻になりましたので、ただいまより第Ⅱ部「地域におけるデジタルアーカイブの構築・連携等」のセッションを始めたいと思います。

私は、第Ⅱ部の進行を務めます国立国会図書館の奥村と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本セッションのプログラムについては、こちらのスライドのとおりでございます。

まず、開始に当たりまして、諸注意事項を御案内いたします。

本イベントの撮影・録画については、基本的に自由ですが、登壇者から撮影・録画等不可の申出があった場合は、それに従っていただきますようお願いいたします。また、本日のイベントの録画は、後日、YouTubeのジャパンサーチ公式チャンネルに掲載を予定しております。

次に、本セッションのプログラムの詳細及び発表者のスライドにつきましては、内閣府知財のイベントページにも掲載しておりますので、適宜御参照いただければと存じます。

今日のイベントの様をSNSで発信される際は、こちらの画面にもありますとおり、ハッシュタグをつけて御発信いただけますと幸いです。

また、本セッションの間、登壇者に御質問がありましたら、ZoomのQ&Aのほうへ御投稿をお願いいたします。質問についてはZoomでのみ受け付けておりますので、御質問のある方はYouTubeライブ配信ではなく、Zoomから御参加いただけますようよろしくお願いいたします。

なお、頂きました御質問についてですけれども、適宜、パネリストや事務局から御回答させていただきます。時間内にお答えできなかったものについては、後日、フェスのページ上で掲載いたします。

では、プログラムに入りたいと思います。

初めに、ジャパンサーチの概要と連携方法について、国立国会図書館から説明をいたします。

○眞籠氏 画面のスライドは見えておりますでしょうか。

○司会(奥村) はい。見えております。

○眞籠氏 ありがとうございます。

では、改めまして国立国会図書館の眞籠と申します。私からはジャパンサーチの概要と連携について、御案内させていただきます。

本日の御説明の流れは以下のとおりとなっております。

まず初めに「ジャパンサーチとは」ということで、ジャパンサーチについて簡単に御案内させていただきます。

ジャパンサーチとは、デジタルアーカイブの検索・閲覧・活用のプラットフォームです。様々な分野のデジタルアーカイブと連携しまして、我が国の多様なコンテンツのメタデータをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォームとなっております。普通のデータベースですと、検索や閲覧までは同じようにできるかと思いますが、ジャパンサーチでは活用できるという点が特色となっております。こちらの活用方法については、後で触れさせていただきます。

また、ジャパンサーチは国全体の取組となっております。政府の「知的財産推進計画」に掲げられております国全体で取り組む内容となっております。

運営の主体は内閣府知的財産戦略推進事務局に設置された委員会となっております、私ども国立国会図書館はシステムの開発運用、連携の実務などを担当しております。現在「ジャパンサーチ・アクションプラン 2021-2025」という活動方針に沿って取組を進めている最中でございます。

現在のジャパンサーチの連携状況を御説明いたします。

まず、連携データベース数でいきますと、8月22日時点で210データベース、連携機関（つなぎ役）で数えますと40機関となっております。こちらは直近で増えたところでございます、第I部で御発表、御登壇いただきました大分市の「大分市デジタルアーカイブ～おおいの記憶～」と、この後、御発表いただきます栃木県の「とちぎデジタルミュージアム“SHUGYOKU”（珠玉）」の2データベース、こちらが加わりまして、つなぎ役としては42機関、データベース数としては213データベースが検索可能となっております、全部で約2900万件のコンテンツを検索できるものとなっております。

連携機関を40機関、あるいは42機関と申し上げましたが、こちらはちょっと少ないのではないかとと思われるかもしれませんが、この連携機関というのがつなぎ役というものを果たしていただいております、いろいろなデータ提供機関をまとめてくださっている機関で数えて42機関となっております。ですので、データを提供してくださっている機関を細かいところまで数え上げますと、大体1,200機関以上から御提供いただいているということになります。

次に、ジャパンサーチの主な機能3つについて御説明いたします。

まず初めに、検索機能、こちらはどのデータベースでもあるかと思いますが、普通に横断検索をしていただいたり、あと、画像で検索ということもジャパンサーチでできるようになっております。

2つ目といたしまして、クリックするだけで楽しめる機能、主にギャラリー機能というものを御用意させていただいております、ただ検索するだけではなくて、ギャラリーとしてそれぞれの連携機関で作成いただいたギャラリーを御覧いただいて、楽しむということもできるようになっております。

3つ目といたしまして、利活用機能ということで、個人の方が自分でいろいろなコンテンツを組み合わせてギャラリーをつくっていただいたり、あと、連携機関の方が電子展示会などをつくっていただいたりということが可能になっております。

こちらが連携機関によるギャラリー作成の例でございます。

今回のデジタルアーカイブジャパン・アワードで受賞されました東京富士美術館様は、実際のリアルの展示会・展覧会で使用されているコンテンツをオンラインでも見られるようにするというギャラリーをたくさんつくってくださっております。

東京大学附属図書館様でも、実際の企画展で行われたコンテンツを、よりオンラインでもたくさん見られるようにするギャラリーをつくっていただいております。

こういった形で連携していただきますと、ジャパンサーチ上で展覧会、電子展示会などを開けるギャラリーを作成していただくことが可能になっておりまして、こちらがジャパンサーチで活用できる機能になっております。

次に「連携方針と連携手続」について御説明いたします。

ジャパンサーチの連携方針は、先ほどつなぎ役を介して連携すると御説明いたしました。ジャパンサーチでは、分野、あるいは地域コミュニティのつなぎ役機関となっている機関様と連携させていただくというのが原則となっております。

このつなぎ役というのがちょっと分かりにくいのですが、例えば、同じ分野や地域内のアーカイブをまとめてくださっているような機関が対象となります。もしそういったつなぎ役が不在の分野、あるいは地域の場合には、直接連携ということも可能となっております。こちらの下の方の緑の枠に入っている条件に当てはまる場合には、つなぎ役ではなくても直接連携するということが可能となっております。

ジャパンサーチと連携されたいという機関様がいらっしゃいましたら、こちらの5つのステップで連携の手続が進むということになっておりまして、まず初めにジャパンサーチにお問合せをいただきまして、次に、内閣府知財の委員会のほうで承認をしていただく。その後、文書の手続、登録手続ということで連携の作業が完了ということになっております。なので、もしジャパンサーチと連携されたいということがございましたら、まず初めに、ジャパンサーチのお問合せ窓口などから御連絡をいただきますようお願いいたします。

次に「ジャパンサーチのメタデータ連携の仕組みについて」、御案内させていただきます。

ジャパンサーチとの連携はメタデータの連携となっております。タイトル情報とか書誌データといったメタデータ情報と、コンテンツの縮小画像、サムネイル画像を連携させていただくというものでして、精細な画像とか、そういったコンテンツ本体を頂くということではございません。あくまで検索用のメタデータを連携していただくというメタデータ連携となっております。

メタデータ連携の流れでございますが、連携の手続を終了していただきましたら、多様

なファイルでアップロードをすることで、メタデータをこちらに連携していただきます。その際に、アーカイブ機関で使われているフォーマットなどをそのまま使えるということが特徴となっております、ジャパンサーチのために何か加工していただくことは必要ないというものになっております、簡単に連携の手続きが可能となっております。

データ登録していただいたメタデータは、こちらのジャパンサーチのほうで共通項目ラベルにひもづけさせていただいて、全国の全てのデジタルアーカイブを横断的に検索できるようにするというを行っております。また、利活用のためのデータ変換なども行っております、そこからAPIなどを使って利用者・活用の方に使っていただくということになっております。

最後に「二次利用条件の設定について」、少し御案内させていただきます。

ジャパンサーチにおける二次利用条件ですが、まず、タイトル、著作者といった基本的なメタデータに関しては、自由な利用をさせていただくためにCC0を推奨しております。また、サムネイルやコンテンツに関しましても、できる限りオープンな条件で御提供いただくをお願いしています。

個別のコンテンツのページとか、データベースの紹介ページで、こういったメタデータの利用条件、コンテンツの利用条件について、分かりやすく表示するようになっております。

ジャパンサーチで設定できるデジタルコンテンツの権利区分は15種類ございまして、CC0やパブリックドメインといったものから、クリエイティブコモンズライセンス、あと、どうしてもオープン化できないという場合には、著作権ありでいろいろ設定していただけるというものになっております。詳しくはジャパンサーチの「デジタルコンテンツの二次利用条件について」のページを御参照いただければと思います。

もし連携を御希望されるという機関様がいらっしゃいましたら、最後にこちらのお願いをいたします。

まず、メタデータについては、名称・タイトル、IDのみが必須となっております。こちらのIDは、将来、システムリプレースなどがあつた際に変更されないような永続的なIDをお願いしています。あと、ジャパンサーチから本体の所蔵元のコンテンツに飛ばす際のリンク先のページも固定的なURLをお願いしています。

細かな連携方法については、こちらのリンク先にございます「ジャパンサーチとの連携方法」についてのパンフレットを御参照いただければと思います。

また、改めての御案内となりますが、メタデータのライセンスについては、原則CC0をお願いしております、基本的にはオープンな形でのメタデータの流通をお願いしています。

また、サムネイル画像、デジタルコンテンツ本体につきましても、ウェブ公開を増やしていただきまして、可能な限りオープンなライセンスでの提供をお願いしております。

もしデジタルアーカイブで困ったことがあれば、例えば、デジタルアーカイブをゼロから始めたいといったことがございましたら、これまで内閣府知財事務局のほうで様々なガ

イドラインを御提供してまいりましたが、技術進歩などもございましたので、そちらを改定いたしまして、近日「デジタルアーカイブ活動のためのガイドライン」ということで新しいガイドラインを公表する予定でございますので、こちら内閣府知財事務局のホームページを御参照いただければと思います。

最後に、連携方法について、具体的に動画で御説明しております。ジャパンサーチのYouTube公式チャンネルを御覧いただきまして、こちらの動画などを御覧いただきますと、連携方法について解説しておりますので、御覧ください。

また、これまで連携していただきました機関の皆様インタビューをさせていただきまして、生のインタビューの声をお聞きしておりますので、こちらもぜひ御参照いただければと思います。

駆け足となりましたが、私からの御説明は以上となります。どうもありがとうございました。

(4) 地域アーカイブの域内連携・活用及びジャパンサーチとの連携事例報告

○司会（奥村） では、今からジャパンサーチの5つの連携機関、そして、連携を予定している機関から、地域におけるデジタルアーカイブの構築や活用、ジャパンサーチとの連携について御発表いただきたいと思っております。

では、まず最初に、上田市マルチメディア情報センター、井戸様から御発表をお願いします。

○井戸氏 上田市マルチメディア情報センターの井戸芳之と申します。

本日は、上田市のデジタルアーカイブ事業とジャパンサーチの連携の報告をさせていただきます。画面を共有します。

本日は、この3つの内容についてお話をさせていただきます。

最初は「上田市のデジタルアーカイブ」についてお話をします。

上田市では「上田市地域映像デジタルアーカイブ」という名前をつけて、平成8年からデジタルアーカイブ事業を行っております。平成8年というのは1996年ですので、今年2023年ということで、この事業を27年続けてきたこととなります。

タイトルの下に書いてある5行の文章が、事業を始めた当初に設定したこの事業の説明です。赤い文字でキーワードが書いてあります。例えば、一番最初の「写真や記録映像」を主な対象としたということで、事業の名前に「地域映像」という文字が入っているのはそういったことです。

それから、最後の「コンテンツとして再利用」とか、あるいは「外部への発信を行う」というところが、当初からコンテンツ化、あるいは発信を意識した取組であったということが一つの特徴かなと思います。

それから、事業を進める中で、アーカイブの効果を示すということで、収集した映像の

上映会を開いたり、パッケージにして手に持って分かるような形の効果を市民の皆さんに提供したり、あるいは市民にも参加をしていただくために、家に残っている写真ですとか、映像フィルムの提供を呼びかけたりといったことを始めた当初から続けていることも一つの特徴かと思います。

さらに、当初は写真や記録映像を対象にしておりましたが、博物館、美術館の収蔵品、あるいは文化財なども収集・保存の対象にしてきました。

それから、当初は映像・画像データのデータベースの構築という意識はほとんどなくて、テーマ別にホームページをつくって発信するということが主な活動でありました。

これまでに34個のサイト、13個の映像作品、6個のパッケージ作品をつくっています。テーマ別のホームページという話を先ほどしましたけれども、テーマというのは、例えば、上田市立博物館の収蔵品というテーマを設けるとか、あるいは文化財という観点で集める。あるいは江戸時代の信濃の国の絵図が何枚かありますので、それを集めて一つのサイトにする。それから、上田市ゆかりの芸術家、科学者などのサイトをつくるというような様々な観点でテーマを設けて、そのホームページをつくるということでやってまいりました。

これらの制作に年間150万円ぐらいの予算を充てています。毎年1つ、ないし2つの成果物をつくらうということでやってまいりまして、それを25年以上続けてきたところ、34個とか、13個というかなりの数の成果物になったということです。

事前に頂いた質問に予算のことを聞かれたものがありました。継続的な予算の獲得をどうするのかということですが、私は、1つは、毎年何らかの成果を上げるということが市民の理解にもつながって、予算獲得にもつながるのではないかと思います。

次に、ジャパンサーチとの連携のことについてお話をいたします。

まず、連携の概要ですが、昨年、令和4年8月に連携を開始しました。6個の関連機関、7個のデータベースがあります。

ちょっと補足しますと、上田市は直接連携、つなぎ役という形で連携しております。上田市がつなぎ役として、例えば、上田市立博物館、上田市立美術館といった連携機関・関連機関があるという構造になっています。私がおりますマルチメディア情報センターについても、そのうちの1機関といった位置づけです。

次は登録レコード数ですが、1万9757件の登録レコードがあります。

そして、予算ゼロ事業ということですが、連携に係る作業をマルチメディア情報センターで内製いたしましたので、もちろん人件費はかかっていますが、その人件費だけということで、いわゆるゼロ予算事業としてジャパンサーチと連携しております。

次に、連携の目的についてお話をします。

実は実現しなかったことがあってジャパンサーチとの連携を求めたのですけれども、1つは、アクセス数を増やすということです。これは多くの連携機関の皆さんが共通して思っている目的ではないかと思います。それから、もう一つは、デジタルアーカイブ画像データの横断検索をやりたかったということです。

それまでにはこういう課題がありました。テーマ別のホームページをたくさんつくりましたので、個々にアクセスしていかないと、結局、何があるのかが分からないといったことがあります。言い換えますと、上田市が保有する画像データの全体から探すということではできない。それを実現するためにグーグルサイト検索、あるいはデータベースサーバーの導入などを検討いたしましたけれども、なかなかそれがうまくいかないといった状況でした。

ジャパンサーチ提供の簡易Web APIという機能を使うことによりまして、そちらを解決することができたということが、今回の御報告の一番の目的です。簡易Web APIを使って、それを私どものデジタルアーカイブのポータルサイトの横断検索ページとして公開しております。ちょっと具体的に見ていただきます。

こちらが実際の横断検索ページです。ここに、先ほど少し出てきました上田市の絵図について調査したいという方がいらっしゃったとして、検索してみたらどうなるかということです。

こちらに表示されておりますように、登録したデータベース7つ全てを対象にして検索をする。あるいは選んで検索することもできます。検索しますと、このような形で検索結果が出てまいります。正保の信濃の国絵図、元禄の信濃の国絵図、天保の信濃の国絵図は「上田古地図・絵図デジタルアーカイブ」というサイトに収録されていることが分かります。元禄の上田城下町絵図は博物館の収蔵品ですので、博物館のサイトに収録されている。それから、文化財は文化財を紹介するサイトに収録されている。このように様々なサイトに別々に収録されているものが1つのリストになって表示されていることが分かります。

それから、こちらに動画像も検索されてきています。城下町絵図をテーマにした講演会の様子をYouTubeに公開しているのですけれども、上田市の絵図について調べようとした方に対して、静止画の情報だけではなくて、それを解説した動画にも導いてくれるわけで、利用者により高い価値を提供できるようになったと思っています。実はこれは想定外の効果だと私は思っております。

では、資料に戻ります。

連携の効果・感想ですけれども、目的にありましたアクセス数を増やすということについては、昨年8月から連携を開始していますので、1年間で1,106アクセスございました。これが多いのか、少ないのかの判断、比較は難しいのですけれども、今後注視したいと思います。

画像データの横断検索につきましては、先ほど申し上げたように、予想外・想定外の効果もありましたので、理想的な形で実現したということで大変満足しております。

それから、感想ということになると思うのですけれども、つなぎ役という形で連携機関となったことによりまして、今後の活動が大きく広がったなと思っています。具体的には後で少しお話しします。

今後の展開としては、実は博物館、美術館のデータベースに収蔵品全部はまだ登録して

いせんので、これを充実したい。公文書館の資料については、画像データがまだわずかしかなかったりで、画像データ化を進めたいと思っております。

それから、今後の活動が大きく広がったというところの具体例になりますが、民間や大学等が進めるアーカイブ活動との連携です。上田市には長野大学という大学がありますが、そこでもアーカイブ活動を積極的にやっていただいています。藤本蚕業歴史館という民設の資料館のデータベースが既に出来上がっておりますので、それをジャパンサーチに連携しようという話を既にしております。

それから、ジャパンサーチの機能を利用した見せ方、使い方、ギャラリー等の研究をしていきたいと思っております。

要望ですが、アクセス数を増やすというところで、先ほど今後注視と申し上げましたけれども、検索エンジンでジャパンサーチのコンテンツが上位に表示されるようになれば、大変ありがたいなと思っております。

次に、横断検索について少しお話しします。同じように複数のデータベースの横断検索をしたい自治体の皆さんがいらっしゃると聞きましたので、少しお話をさせていただきます。

上田市ではAPIを利用した横断検索をやっておりますが、こちらはプログラムとか、ウェブ制作の中級以上の知識が必要だと思います。それで、民間企業に委託しました。大体30万円ぐらいです。時間もコストもかかります。時間もコストもかからない方法として、テーマ別検索ですとか、ウェブパーツを利用するということがあります。QRコードの先に具体例がありますので、お時間のあるときに見ていただければと思います。

最後に、地域アーカイブの構築と活用と意義についてお話しします。

活用としては、映像の出前上映会を2003年から469回やっております。年間にすると大体24回、最近は感染症ですごく減っていますので、それも含めて年間24回やりました。画像データの提供が1,500件、2015年からの8年間ですので、年間188件ぐらいです。事前に頂いた質問に雑誌や教科書への提供事例があるかということがありましたけれども、結構たくさんあります。使いやすくなっていれば、利用していただけたと思います。あと、映像資料の商品化ですとか、小中学校での活用ということをやっております。

最後に、地域アーカイブ構築の意義ですけれども、地域研究の活性化につながっていると思います。特に発表という意味でも、地域の研究グループの皆さんの成果をホームページとしてまとめたりしておりますので、そういうこともあります。

あと、何かを始めたいときによりどころとなっている。特にそれについては、集積を続けてきたことによって、あそこに相談すれば何かあるかもしれないということがあって、それで、そういった集積にも意義があると思っております。

ちょっと駆け足になりましたけれども、上田市のデジタルアーカイブについての御報告をこれで終わりにさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

○司会（奥村） 井戸様、御報告をありがとうございました。

では、続きまして、縄文遺跡群世界遺産事務局の鹿内様から御発表をお願いいたします。鹿内様、よろしくをお願いいたします。

○鹿内氏 御紹介に預かりました縄文遺跡群世界遺産事務局の鹿内と申します。世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」のデジタルアーカイブであります「JOMON ARCHIVES」について、私のほうから御報告をさせていただきます。

本日は、画面上にお示ししております5点について、順番にお話をしていきたいと思っております。

まず初めに「JOMON ARCHIVES」についてお話をする前に、簡単に世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」について御紹介をさせていただきます。

縄文遺跡群は、北海道、青森県、岩手県、秋田県に所在しております17の遺跡から構成されております。おとしの7月に開催された第44回世界遺産委員会拡大大会合におきまして、農耕社会以前の先史時代の人々の生活の在り方と複雑な精神性を示す物証ということで世界遺産に登録されました。

今、画面にお示ししております地図、こちらに載っております縄文遺跡が世界遺産の構成資産となっております。青森県青森市の三内丸山遺跡をはじめとしまして、青森県つがる市の亀ヶ岡石器時代遺跡、青森県八戸市の是川石器時代遺跡、秋田県鹿角市の大湯環状列石などは高校の教科書や資料集にも登場する遺跡で、もしかしたら皆さんも御存じのところがあるかもしれません。

JOMON ARCHIVESを管理・運営しておりますのは縄文遺跡群世界遺産本部という任意団体になっております。この世界遺産本部は世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一体的な保存・管理と活用の業務を所掌しております。北海道、青森県、岩手県、秋田県の4つの道県と17の構成資産と2つの関連資産が所在する14の市・町から構成されております。その事務局が三内丸山遺跡センターの世界文化遺産課というところに設置されております。

それでは、次に、本題の「JOMON ARCHIVES」について御紹介をさせていただきたいと思っております。

JOMON ARCHIVESは、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」のデジタル情報を一元的に保存して、公開・提供するためのウェブサイトです。世界遺産登録直前の令和3年4月に運用を開始しました。17の構成資産と2つの関連資産、関係する18の自治体が所有する縄文遺跡群に関するデジタルコンテンツを、1つのサイトから検索・閲覧・ダウンロードなどができるよう整備したのになっております。令和5年4月現在で約3,500件のコンテンツを公開しております。

また、誰もが覚えやすいように、名称を「JOMON ARCHIVES」として商標登録も済ませております。

令和3年8月にはジャパンサーチとも連携をさせていただきました。

JOMON ARCHIVESには、今、画面にお示ししております4つの役割があります。1つずつ

御紹介させていただきます。

1つ目の役割は、関係自治体のデジタルコンテンツを集約して保存・公開することです。JOMON ARCHIVESは、各自治体においてばらばらに管理していたデジタルコンテンツを集約・統合し、保存・公開しております。コンテンツは写真画像だけではなく、動画や発掘調査報告書、保全報告書、保存管理計画などの各種計画、パンフレットなどとなっております。これによりまして縄文遺跡群の価値や魅力を一体的に情報発信しております。

次に、2つ目の役割ですけれども、関係自治体のデータベースとの連携です。自治体の中には独自のアーカイブで出土品などのデジタルコンテンツを公開しているところもございます。それらの情報についても集約・統合するために、それぞれのデータベースをJOMON ARCHIVESと連携させるという機能を持っております。例えば、三内丸山遺跡の出土品の写真などをコンテンツとしているデジタルアーカイブであります「Sanmaru Search」と連携をしております。

次に、3つ目の役割ですけれども、ジャパンサーチとのつなぎ役の役割を果たしております。JOMON ARCHIVESとジャパンサーチを連携させて、ジャパンサーチ上でもJOMON ARCHIVES、各自治体のコンテンツを検索・閲覧できるようにしております。

最後に、4つ目の役割ですけれども、写真などの利用手続の自動化、ワンストップ化です。JOMON ARCHIVESの当初の目的はこの役割の強化にありました。JOMON ARCHIVESができるまでは、各自治体が所有する写真画像をテレビや雑誌などに使用する場合は、個別に申請する手続が必要でした。これを改めまして、利用者の皆さんの利便性を向上させるため、JOMON ARCHIVES上でまとめて複数の自治体の保有する写真画像を申請できるようにしました。

また、利用申請のあったデータについても、オンライン上の自動送信により提供するシステムを構築しました。アーカイブを公開した令和3年度は4,500件余りの申請手続を自動化することができました。これによって、利用者の方は時間のかかる煩雑な書類での手続を行わずに済むようになりました。また、自治体やこちらの事務局の事務を大幅に軽減することができました。

事前の質問の中で、導入されて感じる事ができた成果・効果とありましたけれども、事務局のほうではこういった効果は大きく感じているところです。

デジタルアーカイブの構築・公開に当たりまして、この4つ目の役割が特に工夫をしたところとなっております。

なお、コンテンツの著作権については、基本的に非営利目的のみの使用を条件とするものは公開しないという取扱いとしました。また、国際的に普及しているクリエイティブコモンズライセンスの表示4.0国際に規定される著作権利用許諾条件と互換性を持たせました。

次に、JOMON ARCHIVESの活用状況について御紹介をさせていただきます。

JOMON ARCHIVESのコンテンツは広くダウンロードされておりまして、令和3年度は1万4340件、令和4年度は5,162件の画像などがダウンロードされておりまして、利用されております。

JOMON ARCHIVESのコンテンツは、非商用目的での利用はもちろん、商用目的での利用も可能になっておりまして、幅広い場面・主体によって活用されているところになります。

どのような用途で利用されているかの一例ですけれども、テレビ番組や新聞、書店でよく見かける旅行ガイド雑誌など、多くの人の目に触れる媒体にも利用されておりまして、縄文遺跡群の認知度向上につながっております。

事前の質問で雑誌などへの資料画像貸し出しにデジタルアーカイブを利用している例があればとあったのですが、当アーカイブは雑誌などにも使われております。

また、地元企業がお土産品のパッケージに画像コンテンツを活用するなど、地域振興につながる事例も見られます。例えば、今のスライドの右下に掲載している画像のように、JOMON ARCHIVESで公開している縄文遺跡の写真がパッケージに使われたりもしております。

次に、ジャパンサーチとの連携についても触れさせていただきます。

私たちは、JOMON ARCHIVESの検討、システム構築段階からジャパンサーチとの連携を視野に入れて作業を進めてまいりました。メタ情報やクリエイティブコモンズライセンスの表示などについては、ジャパンサーチの仕様を準用しております。そのため、ジャパンサーチとの連携にかかるコストは、これにより抑えることができました。

現状、JOMON ARCHIVESの認知度はまだ低いとは思っておりますが、ジャパンサーチとの連携によって、ジャパンサーチの利用者の皆さんにJOMON ARCHIVESのコンテンツを見つけてもらえるチャンスが増えていると思っております。

昨日、たまたまなのでございますけれども、ジャパンサーチをのぞいたところ、トップページの検索キーワード例のところに「縄文土器」と出ていて、それで調べると当アーカイブのコンテンツが出てくることになっていまして、大変ありがたいと思っていたところでした。

では、最後に、JOMON ARCHIVESを通して地域アーカイブを構築・活用する意義について、お話しさせていただきたいと思っております。

JOMON ARCHIVESは、利用者と運営者の双方にとってメリットのあるものとなっております。利用者の皆さんにとっては、欲しいコンテンツを1つのサイトでまとめて検索して入手できるようになったこと。つまり、情報収集の利便性が向上したこと。編集しやすく二次利用に向いている電子データを自宅でダウンロードして使えるようになったこと。つまり、電子データ化による利便性向上が図られたこと。1か所で書類作成の手間なくオンライン上で手続が完結することによって、申請手続の簡略化がなされたこと。この3つのメリットを挙げることができると思っております。

また、運営者にとっても、情報を一元化したことによって、網羅的な情報を統一的な方法によって情報発信することが可能になりまして、露出度や認知度向上につながることで、劣化しない電子データでコンテンツの情報を保有することで、将来にわたり情報を継承し

やすいこと。申請対応業務のコストが削減されて継続的に運営しやすくなること。この3つのメリットを挙げることができると思います。

このような地域アーカイブは、様々な場面、多様な主体による地域資源活用の可能性を広げるものでありまして、また、それを将来にわたって継続的に可能にするものだと考えております。

それでは、以上で「JOMON ARCHIVES」についての報告を終わらせていただきます。皆様、御清聴ありがとうございました。

○司会（奥村） 鹿内様、御報告をありがとうございました。

では、続きまして、神戸大学附属図書館情報管理課の守本様から御発表をお願いいたします。

○守本氏 では、画面共有をさせていただきます。

皆さん、こんにちは。神戸大学図書館の守本と申します。

今日は、神戸大学附属図書館のデジタルアーカイブであります「新聞記事文庫」について御紹介させていただきます。大学の図書館でやっている事業ですので、これまでのものとは少し毛色が違うかなとは思いますが、参考にしていただければなと思っております。

神戸大学にデジタルアーカイブというのがありまして、主なコンテンツとして4つあります。阪神・淡路大震災の関係資料を収蔵した「震災文庫」、今日紹介します「新聞記事文庫」、ほかに貴重書のコレクションと、大学図書館は全国でよくやっているのですが、学内の研究成果を公開している機関リポジトリである「Kernel」と4つありまして、全部が図書館のシステムの中に組み込まれていて、1つのシステムの中にデータがあるのですが、データベースとしてはそれぞれ分かれているという形で運用しているところです。

新聞記事文庫というものはどういうものかといいますと、神戸大学の前身校に神戸高等商業学校というものが明治の頃にありまして、そこの調査部という部署が当時の新聞記事の切り抜きを一生懸命始めまして、明治44年から昭和45年までずっと切り抜きを続けていました。その切り抜き帳、B5横ぐらいの大きさのものが3,200冊たまっています、数えたことがないというか、数えられないのですけれども、推計で50万記事はあるだろうという膨大な切り抜きの固まりになっております。

これの特徴としましては、当時の教員がこの記事を切り抜こうということをチェックして切り抜いていますので、専門家による選択や分類がなされているということ。それから、その当時の時代を反映した分類法、28の分類に分かれているのですけれども、その分類法にのっとって切り抜き帳の束がつくられているということ。それから、採録紙は日本国内だけではなく、海外の当時植民地となっていた中国とか、台湾で発行された新聞も採録の対象紙となっております。

ただ、50万記事と膨大にあったのですけれども、総目録がなくて記事を探すというのが

非常に大変というか、探せないといえ探せない状況にずっと置かれていました。

それをデジタル化しようということで、2000年6月にデジタル化して公開を始めました。戦前・戦中期の記事、38万件と書いているのですけれども、実際は36万件です。すみません。これは数字の間違いです。その36万件を対象にデジタル化を始めましょうということで、2000年6月から今日に至るまでずっとデジタル化をし続けております。

公開しているものは、画像、インデックスと呼んでいるメタデータ、本文のテキストを入れております。記事を全部文字起こしをして、その記事を全部公開しているということになります。その結果、本文の中の文章にも検索がかかって、記事が見つけれられるという状況になっております。

さらに、本文テキストは、現代仮名遣いに置換をして置いております。旧仮名遣いでそのまま打ってもいいのですけれども、検索するとき、これは旧仮名遣いなのか、それとも新仮名遣いなのかというのを考えなければいけないのをやめて、普通に今の言葉でやれば出るようにするという方針で当時から始めているということになっております。

署名記事が時々あるのですけれども、それは著作権の有無を確認して、出すか、出さないかというのをやっております。特に明治以降の新聞記事ですので、近現代のものですから、実は著作権がまだ残っているような記事も中には混ざっています。9割9分は大丈夫なのですが、著作権が既に切れているものが多いのですけれども、切れていないものに関しては調べています。

例えば、今は基本的には新聞社が公開してから70年で著作権が切れるので、公開している。文章も70年で著作権が切れるので、公開しているのですけれども、署名がある場合はその署名の人を調べて、無名の方とか、もう誰か分からないという人については、著作権法の52条にのっとって、著者の特定が不可能で記事公表後70年を経過しているので、特に何もなく公開するという判断をして公開しております。

それから、誰々特派員とか何とか通信員とか、そういう署名もあるので、その場合は、職務上の作成だと我々で判断して、著作権法の15条にのっとって、新聞社にあるのだから職務上作成した文章として、70年たったので、公開しますということで、そういう判断によって公開しています。

それでも著作権がまだ切れていないものが混ざっている場合は後回しにしています。まだ全部の記事の公開が終わっていませんので、後回しにしているということです。近現代の文字資料を公開するに当たっては、著作権を調べないといけない状況ではあるかと思いますが、あまり完璧ではないのですけれども、そういう感じで調べてやっています。

その結果、23年たった現在で32万件のデータが公開済みとなっております。

これまでやってきた結果、やはり課題がありまして、本文テキストを作成することになりますと、文字起こしにかかるコストというのが非常にかかります。労力、時間、それから、目で見て人が文字起こしをするので、品質維持が完璧ではないということになります。

そのコストを捻出するために、大学には科研費というのを申請する手段がありますので、それをやっているのですけれども、毎年採択されるとは限らない状況になっています。

図書館でこの新聞記事文庫に対してのお金というのも、一応、毎年つくことはつくのですが、校正とかに関わる人員の人件費を何とか維持した上で、外注できるほどの予算が毎年つくわけではないので、少しずつという感じになっていまして、科研費がついたときに一気に外注してたくさんつくるといった形でこれまで来ております。

それと、最近ではコロナで在宅勤務があった場合に、在宅でやる仕事として文字起こしを依頼していたという形で、少し内部の人たちで進めているところではありますけれども、まだ全部は終わり切っていないという状況になっています。

利用の促進とPRもやっております、いろいろな資料展を開催したり、出展したり、今日のように発表する機会があれば、ぜひということをやらせていただいているという状況になっております。

こうやって本文も含めて公開した結果、どういうことが起こっているかという、レファレンスにいろいろ使われております。例えばということで、新聞記事文庫の活用事例集をウェブサイトで公開しています。今見えていますでしょうか。

○司会（奥村） はい。見えております。

○守本氏 こちらが図書館のウェブサイトで公開している新聞記事文庫の活用事例になります。こういう新聞記事がこういう論文等に使われましたよ、というものを出しているところです。

論文等だけではなくて、商業利用とか、二次利用の例も用意しております、こういう記事がいろいろなブログ、展示会、何かテストの問題に使ったのですかね、そういうものになっております。

活用事例集に関しましては、二次利用してもらう際に、二次利用のフォームがあるので、そのフォームの中で活用事例集に挙げていいですか、というものも同時に聞いていますので、「許可する」に入れてもらったものに関して先ほどのページに活用事例を挙げさせてもらっている。こういう目に見える形で、使ってもらっていることが分かるというのは非常によいことかなと思っております。

スライドに戻ります。

こういった活用事例を見ていると、経済史だけではなくて産業史とか、技術史とか、その他地方史とかにも使われていることが分かります。さらに、先祖の事績に関するレファレンスなどに使われて、御先祖様の名前を入れると本文の中に出てくるみたいなものがありますので、過去にそういう形でも使われたことがあります。

さらに、図書館の方はよく御存じかと思うのですが、レファ協というものがありまして、そこにレファレンス共同データベースというものがございまして、そこで「新聞記事文庫」と検索すると、今、レファレンスに使われた事例が1,166件出てきております。新聞記事文庫でこういう記事を見たのだけれども、から始まるレファレンスと、何かレフ

アレンスがいったときに、新聞記事文庫にはこういう記事がありますよ、という回答に使われたケースと、幾つかございますので、これも我々が新聞記事文庫をウェブで公開することによる利用の例になるかなと思っております。

こういった活用のために使ってもらっているので、本文を入れたということは、すごく大変で労力はかかるのですが、入れた分だけ使ってもらっていますので、非常によかったかなと思っております。当時、始めた方の決断は素晴らしいものだったと思っております。

この新聞記事文庫も外部連携をしております、もちろんこのジャパンサーチと連携しているわけですが、この画面はジャパンサーチのトップ画面で、「労働歌」で検索したときにちゃんと上のほうに出てくるなということで、例として挙げさせてもらっております。ただ、ジャパンサーチのほうには本文は行っていませんので、「労働歌」という言葉が本文に出てくるものがあっても、ここには出てこないというところがちょっと残念なところではありますけれども、それでも発見されやすくなるのかなと思っております。

どのように連携しているかといいますと、ちょっと専門用語になってきますけれども、OAI-PMHを使ってJPCOAR形式のメタデータを国会図書館へハーベストしているということになります。ものすごく標準なやり方をして、ものすごく標準な形式のデータベースを持っていてもらっているということになります。実際は国立国会図書館のNDLサーチのほうにうちの新聞記事文庫のデータがいったん格納されまして、それがNDLサーチからジャパンサーチのほうへ行くという形で進んでいます。

先ほども申しましたけれども、神戸大学の附属図書館で図書館システムを導入して、それにそういう外部連携についての仕組みも最初から備わっていたので、この形式で国会図書館とやり取りしたいということを業者と国会図書館と打ち合わせまして、そのシステムで対応することができました。改修も大したことがなく、無料でできたという状況になっていますので、ほかの館の方に参考になるのかと言われると、そうでもないかとは思いますが、こういう例もあったということになります。ほかの大学の図書館の方がおられましたら、ぜひ御検討いただければと思います。

そういう外部連携をしたことによって、Findableと書いてありますけれども、見つけられる機会が向上しているかなと思っております。

新聞記事文庫以外にも、震災文庫のほうは東日本大震災のアーカイブであります「ひなぎく」というものと連携しております。機関リポジトリのKernelはIRDBという機関リポジトリを集めたデータベースと連携していますし、貴重書もジャパンサーチと連携予定で、来週月曜日ぐらいから連携が始まると伺っています。ぜひこちらのほうも利用いただければかなと思っての次第です。

ここに挙げた以外にも、我々ほとにかく見つけられる機会が増えるので、外部連携をするチャンスがあれば、少しでもやっていたらかなと思って進めているところですので、検

討されている方はぜひやっていただければいいかなと思っているところです。

ちょっと駆け足ではありますがありますけれども、こんな感じで新聞記事文庫の紹介を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○司会（奥村） 守本様、御報告をありがとうございました。

では、続きまして、栃木県生活文化スポーツ部の和久様から御発表をお願いいたします。

○和久氏 栃木県の和久でございます。音声のほうは聞こえていますでしょうか。

○司会（奥村） はい。聞こえております。

○和久氏 ありがとうございます。それでは、画面共有を始めさせていただきます。

今回はお時間を頂きまして、ありがとうございます。栃木県で「とちぎデジタルミュージアム“SHUGYOKU”（珠玉）」の担当をしております栃木県生活文化スポーツ部文化振興課の和久と申します。よろしくをお願いいたします。

この部なのですが、今年度頭というか、昨年度末に組織改編がございまして、もともといわゆる知事部局で文化行政をやっていた課だったのですが、教育委員会から文化財部局を持ってきまして、それを統合する形で文化振興課ということで文化・文化財を一元的に管理する部局として今年度からスタートしたところでございます。

そのため、このデジタルミュージアム“SHUGYOKU”（珠玉）に関しましては、統合前からではあるのですが、文化・文化財の両方を視野に入れた形でデータ連携をしていたというところでございます。

まず「“SHUGYOKU”（珠玉）」とは一体何かということで、名前もちょっと分かりづらい部分もございまして、昨年度、栃木県立博物館文化観光拠点計画、国の認定をいただきまして、そちらの基盤となる「とちぎ文化芸術デジタルアーカイブ」といったシステムがございまして、こちらの一般向け公開機能のことを「デジタルミュージアム“SHUGYOKU”（珠玉）」と呼称しているところでございます。

通常は単館のデータベースがありまして、そのデータベースをとりあえず公開しようみたいなところから始まることが多いかと思うのですが、今回、この事業に関しましては、特に日光にきている文化観光に興味・関心が高い客層、そういった方々を宇都宮、またはその他県内に周遊させるということを想定して考えたツールでございまして、ある意味、スタートの時点で逆というか、どうやったら県内周遊を図れるか、日光から栃木県内に流せるかということで始まったシステムでございます。

また、こちらはいわゆるインバウンドも含む一般の方を対象としております。ですので、一般の方の興味・関心を引きつけて、さらに、ここで完結することなく実際に現地に足を運んでいただく。ここまでを目的としているものでございます。ですので、このシステム、公開につきましても、現地に行ってくださいということにかなり力点を置いているところでございます。

また、当然ですけれども、こういったデジタル化の事業をやっておりますので、文化資源の保存・継承、また、学術利用といったところについても目を配っておるところでござ

います。

続きまして、○の2番目ですけれども、内容としましては、国・県指定等文化財、日光二社一寺、いわゆる東照宮、輪王寺、二荒山神社の宝物群、県立美術館・博物館の収蔵品など、また、県・市町・民間所有を問わず、栃木県全域の主要な文化財を網羅するというところでございます。

こちらに「していく」と書いてあるのは非常に単純な理由でございまして、これは5年計画でございまして、昨年度、認定いただいたのが9月、補助金がついたのが11月ということで、初年度の事業期間が4か月ぐらいしかなかったのです。ですから、当然、完成するところもありませんで、システムそのものの基本機能はできておりますけれども、今後、引き続きデジタルコンテンツ、機能追加をしまして、充実を図っていくというところがございます。

そういった事情もございまして、一般向け、観光客向け、外国人観光客向けというのがありまして、何といたっても単館のコレクション、または栃木県が持つコレクションだけでは何の意味もないというところございまして、県内全体を見渡したいということで、市町村のもの、社寺のもの、個人所有のもの、何も問わず入れていくという形でございます。

これによりまして、いわゆる文化財・文化資源の一元的情報発信によるシナジー効果、また、県内周遊ルート形成への寄与といった効果を狙っておるところでございますし、当然、これらのデータを県立博物館・美術館等の展示にも生かしていくということを考えているところがございます。

また、○の4つ目になりますけれども、県内の全市町参加によりまして「栃木県文化資源デジタル化協議会」というものを立ち上げております。この協議会の中で、県の事業についての御説明、市町村の皆様の御要望やお考えの聴取、さらに、デジタル化の事業の効果、または手法の共有という形で、県内全域のデジタル化の底上げを図るということも考えておるところでございますし、これによって県内全域のデータを入れていくということがよりスムーズに進むというところがございます。

今回、文化庁さんから高い補助率でお金を頂いているということもございまして、撮影、デジタルデータの作成は全て栃木県の負担で、市町村、または民間の一切の資金は頂いておりません。ただし、当然、作成に当たって著作権は県に帰属するという形になってしまいますが、当然、所有者、管理者、市町についてのデータ利用については、一切の制限を設けることなく、フリーな利用、それこそ、この画像を使ってお金をもうけても構いませんという形でお渡ししているところがございます。

また、このシステム構築、今後の維持管理、これも全て栃木県の負担という形でやっておりますので、協力は非常に得られやすい体制で進められているかなと考えておるところでございます。

では、続きまして、具体的に「“SHUGYOKU”（珠玉）」の機能といたしますか、コンテンツを見ていただければと思っておるところでございます。

その前に、次の資料なのですけれども、こちらが栃木県の文化観光拠点計画でございます。このポンチ絵を見ていただければ分かりますとおり、日光に来ている観光客をいわゆるビジネス利用が多く、交通の接続点になる宇都宮とうまくつないでいく。そして、このデジタルミュージアム、デジタルアーカイブを核として、関連する文化資源を持つ市町村へもつないでいくということを想定している事業でございます。

今「“SHUGYOKU”（珠玉）」のページに移ったでしょうか。

○司会（奥村） はい。移っております。

○和久氏 ありがとうございます。

こちらを見ていただければ分かりますとおり、一般の方向けでございますので、非常に直感的に分かりやすい画像のサムネイルで構成し、かつ、こういった区分、絵画・彫刻・無形文化財・工芸品など、とにかくなるべく分かりやすい、それでいて博物館・美術館、または文化財の種別の中で、矛盾を生じないような形でいろいろと考えて始めてきたところでございます。

コンテンツのほうも非常に充実しております、例えば、こちらはいわゆる日光助真と呼ばれる国宝太刀でございますけれども、こちらは東照宮がお持ちのものではありますが、東博さんに寄託されているものでございまして、ふだんは目にすることもできませんし、寄託品ということもありまして、e 国宝にすら入っていないというものでございます。こちらのIIIFで見られる高精細画像で銘とか刃文まで見ることができるよう形にしてございます。

さらに、やはり一般向けということもございまして、原則として写真、説明といった概要部分がないものは掲載しないという形で考えております。開いてみて、名前しかない。画像もない。寸法だけがある。学術利用はそれで結構なのですけれども、これですと一般の方は二度と見てくれないのは間違いないところでございますので、今回はそういったものは極力対象としないということで、逆に言えば、画像がないものは画像を撮影する。説明がないものは図録も含めて説明をつくっていくということを考えておるところでございます。

こちらとしてここが一つ重要だと思っておりますが、実際に足を運んでもらうことが大変重要ですので、通常の公開状況と呼ばれる部分に加えまして、最新の公開情報ということで、今どこに行けば見られますという情報があれば、それを定期的に更新して載せていくという形で考えております。

せっくなので宣伝しておきますと、今、東照宮さんのほうでは国宝の助真、国宗等を含めまして数十年ぶりの名刀展をやっておりますので、多分、これを次に全部見られる機会は、生きているうちはないかもしれないというレベルですので、ぜひ東照宮、日光に来ていただければありがたいかなと思っております。

当然、観光という部分もありますので、観光施設の情報なども入れています。例えば、カモシカというのは国の特別天然記念物でありますけれども、県内の那須どうぶつ王国で

は実際にカモシカを見ることができますので、そういった情報も入れていく形で考えておりますし、また「“SHUGYOKU”（珠玉）」の中の相互リンクという形で、例えば、剥製ということで、県立博物館に剥製がありますという形のつながりもやっていって、1つのページから次のページへ、このように動けるということも考えておるところでございます。

トップページに詳細検索画面というのがあるのですけれども、これは一般向けということでもいろいろ考えていまして、例えば、一時期話題になった『鬼滅の刃』とかがありますね。これを入れると出てくるのです。これは何かというと、あしかがフラワーパークというのは観光地として非常に有名ですけれども、こちらのフジは文化財にもなっております。この中で『鬼滅の刃』の場面を想起させるようなところとして有名でしたので、いわゆる硬い解説以外にも、サブカルといいますか、アニメとか漫画とか、そういったことも含めた集客ができるように、ですから、逆に言うと、子供たちがふざけて好きなアニメとかを入れてみると、何かが出てきてしまうということがあって、そういった意味でも興味・関心を引けるかなと思います。

「刀剣乱舞」と入れれば、衾々切丸とか、いわゆる堀川物の刀剣とかもこんなものが出てきたり、仮面ライダーとか、特撮ものの撮影地なども引っかかってくるというような形でいろいろ工夫をしているところではございます。

栃木県出身の著名な声優で緑川光さんという方がいらっしゃるのですけれども、今回、緑川光さんに博物館・美術館の音声ガイドをやっていただいております。これも通常、特別展でやる場所は結構世にあると思うのですけれども、これは常設展というか、コレクション展などで使えるような形で、つまり、いつ来てもどこでも聞ける。システムも個人のスマホのブラウザで聞けるという形でやっておりますので、常に使えるということの売りの一つとしております。

また、これはおふざけではないのですけれども、一応、栃木弁の音声解説なんていうのも入れていたりします。

○司会（奥村） ちょっと声が聞こえていないようですね。

○和久氏 そうでしたか。失礼しました。

栃木弁というのは、通常の音声ガイドだけではなくて、地方の方言でも聞けるというものを一つの売りとしてつくったところではございます。

では、スライドのほうに戻ります。

この辺りは拠点計画をつくったときの考え方、特にデジタル化について深く入ったところなので、一応、つけてありますけれども、これは割愛させていただきます。

これが流れのポンチ絵でございまして、市町村とともにつくるデジタル化協議会において、このように県内全域の文化資源を検討しまして、デジタルアーカイブに入れていく。その公開が「“SHUGYOKU”（珠玉）」ですよという流れでございまして。

この後もいろいろな事業を考えておりまして、博物館に集客するという意味合いもありますので、県立博物館そのものの魅力アップです。せっかく高精細画像を入れても、スマ

ホでしか見られないのでは意味がないので、博物館に国立工芸館とかで入っているようなデジタルサイネージの導入、スクリーン・プロジェクターの刷新、スマートグラスを使った新しい展示といったことを考えておるところでございますし、観光誘客サイトからの流入、GIGAスクール構想、いわゆる教育機関との連携、さらに、具体的な二次交通の手配、日光と博物館とのガイダンス施設的な連携というのを考えているところでございます。

GIGAスクール構想との連携について、1点だけ御説明したいのですが、これは教育委員会のほうでつくっている郷土学習資料のデジタルブックなのですが、これ自体は紙の冊子をデジタル化しただけなのですが、具体的な作品にリンクが貼ってありまして、このリンクから直接「“SHUGYOKU”（珠玉）」の該当ページに飛べますよと。そうすると、詳しいもの、どこで見られるかというのも書いてありますし、画像もちゃんと高精細で見られますよということで、より興味・関心を引いて、さらには実際に現地に行こうという流れをつくっていただければと考えておるところでございます。

あとは、実際の今後の活用ということなのですが、検討事例の1つとして、ジャパンサーチとの連携によって使える機能であるギャラリーとか、ワークスペースでございますが、こういったものを使いまして、観光でよく使われるマイルート作成機能に類似したようなものをつくってみようということで、試しにやってみたとおるところでございます。

これをやると、観光サイドは、なかなか詳細な文化資源情報を持っていませんので、こういった深い情報を知りたがる方々に適合していただろうという部分、さらにはツアーガイドさんも事前に学習もできますし、ツアー参加者に共有すれば事前学習もできますし、旅ナカでも実際にツールとして使える。さらに、終わった後の自分の思い出をほかの人と共有にも使えるということで、大変有用な機能ではないかなと考えておるところでございます。

実際、この機能は今後「“SHUGYOKU”（珠玉）」にも入れていこうとは思っておるのですが、現在でもこのような形で類似した行為ができると考えているところでございます。

国立近代美術館等でやっていたアートカードなのですが、これも「“SHUGYOKU”（珠玉）」と連動させて、冊子なしのカードのみとして、後ろにはQRコードだけという形でやっていったらどうかということで、今、検討を進めているところでございます。データベースなので、データの更新も可能ですし、このところの調べものもどんどん連携できるので、皆さん、タブレットを持っていますので、学校教育で大変使いやすいということで、有効ではないかなと考えているところでございます。

地域アーカイブについてですが、こちらは単館・単一自治体だけではなくて、地域全体を対象にすることによりまして、一元的情報発信によるシナジー効果、周遊ルート形成、新しい魅力の発見ということもありますし、やはり地域全体のデジタル化の底上げということもでございます。

さらに、文化資源所有者の負担軽減。なかなか修理もままならない中で、記録保存とい

うのはかなり厳しい部分がございますので、そういった部分を県のほうでフォローしていく。今は看板をつくるのも大変ですし、昔の看板を修理するのも大変。英語化なんてとてもやっつけられないと。それを全部この「“SHUGYOKU”（珠玉）」の中で解決し、QRコードを1つ置いておいていただければ、全部スマホで解決できる。そんな形で文化財所有者の負担軽減、また、いらっしゃった方の満足度向上も図っていただけたらいいかなという部分でございます。

また、広く全県を対象にしておりますので、どの小学校、どの市町村でも大変使いやすいというところはあるかと思っておりますので、先ほどのアートカードではないのですけれども、教育機関での活用にも非常に有用だという話が出ておるところでございます。

すみません。駆け足になりましたが、以上でございます。

○司会（奥村） 和久様、御報告をありがとうございます。

では、第Ⅱ部最後の発表になりますが、福岡市の経済観光文化局文化財活用部の福菌様から御発表をお願いいたします。

○福菌氏 福岡市経済観光文化局文化財活用課の福菌と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日は「福岡市デジタルアーカイブ」というタイトルになっておりますが、このデジタルアーカイブは文化財に限定したものであることを最初に御了承いただければと思います。

文化財は必ずしも指定登録を受けたものだけではなく、未指定のものも含んでおります。また、これまで登壇された皆様と異なりますが、福岡市はまだジャパンサーチにデータベースが公開されておられません。現在、ジャパンサーチの連携登録が完了して、公開作業中であるということも併せて事前にお伝えしておきます。今年度末をめどに少しずつジャパンサーチにデータベースを公開していく予定ですので、どうぞお楽しみにお待ちいただければと思います。

以上のような状況ですので、今回は福岡市内の文化財関連のデータベースの概要と、ジャパンサーチとの連携に至った経緯、また、現在、公開作業を進める中で苦労している点などをお話ししたいと思います。

まずは、福岡市と市内の文化財について御説明いたします。

御存知の方も多いと思いますが、福岡市は九州の北部に位置しております。地理的に朝鮮半島や中国大陸と近いこともあり、古くから対外交流が盛んな地域で、それに関する歴史的資料が多数残されていることも特徴的です。

1969年に福岡市役所内に文化財行政が発足してから現在まで、指定・登録を含めた文化財の件数が518件あります。そして、それを扱う市の文化施設や所属が御覧のように複数ございます。

では、福岡市の文化財データの現状についてお話ししたいと思います。それぞれの施設が所蔵する資料の一部をホームページ上で公開しておりますので、簡単に御紹介いたします。

福岡市美術館は、福岡市にゆかりのある近現代・古美術の資料約1万5000点のデータを

公開しています。福岡市総合図書館は、これまで刊行している古文書資料目録のうちの一部のデータ約2万件を公開しています。また、福岡市博物館は、歴史、考古、美術、民俗の分野の所蔵資料約18万件のうち、11万件を公開しています。福岡市埋蔵文化財センターは、所蔵資料の3D画像データを作成して、昨年度から公開を始めたところです。現在は50件のデータが登録されています。福岡市アジア美術館は、アジアの近代美術に関する約4,500件の資料のうち、約3,000件のデータを公開しています。また、文化財活用課は、市内の指定登録文化財や、文化財に関連する情報およそ300件を公開しています。埋蔵文化財課では、1,000か所を超える市内の遺跡の範囲全てをWeb GISで確認できる地図を公開しております。

これらのデータは文化財関連のデータのほんの一部です。このほかに、福岡市の文化財関連施設には、調査・研究によって収集されたデータや資料が数多く保管されています。例えば、福岡市博物館は約18万件の資料があります。福岡市美術館には1万6000点を超える美術作品、福岡市埋蔵文化財センターには約130万件の遺物が収蔵されています。また、福岡市内ではこれまで2,700件の発掘調査が行われているほか、寺社資料調査ですとか、無形文化財の映像記録撮影なども行ってきました。

これらのデータについては、報告書や資料目録、研究紀要、展覧会図録、DVDや市史などを刊行して公開したり、エクセルのソフトで管理したり、データベースのシステムを取り入れて管理していたりと、それぞれの施設とか、管理課によって現状に合った方法を採用しています。

さて、ジャパンサーチとの連携に至った経緯ですが、きっかけは平成31年3月に策定した「福岡市歴史文化基本構想」というものです。これは、今後、福岡市の文化財の保存・活用をどのように行っていくのかという基本理念を定めたものです。その中で、今後は調査・研究の成果をデータベース化し、市民へ公開するという方向性が示されています。

また、この基本構想を基に令和4年7月に「福岡市文化財保存活用地域計画」というアクションプランを作成しました。この計画の中で取り上げた課題の一つに、文化財の情報共有が不十分であるという点があります。文化財の情報を公開はしているものの、その内容は専門性が高くて市民が利用しづらい。また、紙の刊行物が多くて公開が不十分だということ。また、広く情報が行き届いていないという課題です。

その課題に対応すべく、紙媒体資料のデータ化を進め、統一的なプラットフォームに文化財情報を集約し、誰でも利用しやすい形を令和5年度から令和9年度にかけて目指すことになりました。この計画が作成された段階ではジャパンサーチを導入するという事は決まっておらず、そのほかの方法も検討されていたようです。

統一的なプラットフォームをどうするのかということについては、文化財保存活用地域計画を推進するための庁内のワーキンググループというものがございまして、その中で検討されてきました。当初はジャパンサーチの仕組みがよく分からないとか、どの程度の作業量が発生するのか不明などの理由から、ジャパンサーチとの連携に対して懐疑的な意見

もありました。

ただ、ほかの都市のデジタルアーカイブの状況を視察に行ったり、ジャパンサーチが公開しているYouTube動画などの資料を確認して得た情報をこのワーキンググループの中で共有することで、福岡市は統一的なプラットフォームをジャパンサーチにしようという合意が形成されました。

福岡市では、先ほど発表があった上田市さんのように、文化財活用課がつなぎ役となって、福岡市デジタルアーカイブとして各施設のデータを登録することになっています。つなぎ役のタイプはいろいろあると思うのですが、福岡市の場合は、福岡市として新たにデータベースを何かつくって、その上で連携するというのではなくて、それぞれの機関が持っているデータベースをまとめる「福岡市」という箱をジャパンサーチ内につくったというイメージです。

つなぎ役の実務内容としては、国会図書館さんとの文書の取り交わしや内部調整等の事務手続、各施設のデータベース担当者とのジャパンサーチと連携・登録するときの取りまとめを行っています。

先ほど御紹介したとおり、既に各施設のホームページでデータを公開している分があります。その中で、連携のための準備が比較的整っている福岡市美術館、福岡市総合図書館、福岡市博物館のデータをまずは連携して、そのほかの施設については、公開できるデータを順次公開・連携していくことにしています。

次に、ジャパンサーチとの連携に当たって苦労した点についてお話しいたします。

これについては、内部的な点とジャパンサーチとの連携そのものについての二通りございます。

内部的な点としましては庁内の調整が挙げられます。ジャパンサーチとの連携に関しては、国立国会図書館の書類のやり取りがありました。庁内のワーキンググループで合意は得られていたのですが、連携に関する文書で回答する際に、各部署にいろいろまたがっているので、決裁の段階でこの調整とか、再度説明というところに時間がかかりまして、回答の時間が少し遅れた、予定よりも遅くなったという点がありました。

それと、ジャパンサーチとの連携そのものの点については、2つございます。

1つ目は二次利用条件の設定です。ジャパンサーチでは、画像の利用について、先ほど御説明がありましたとおり、CC0やCC BYを推奨されていると思います。福岡市の幾つかの施設は所蔵品の画像を有償提供していること、また、著作権の関係などから、それぞれの画像について、個別に二次利用条件を判断して設定する必要が生じています。

2つ目はジャパンサーチの操作の習熟です。実際にジャパンサーチにデータを登録する段階では、ホームページ作成などを行ったことがある人でしたらスムーズに操作できるユーザーインターフェースがそろってはいますが、ワードとかエクセルの操作しかしたことのない人は操作に慣れるまでに少し時間がかかるようです。ただ、慣れてしまえば、操作自体は楽なので、担当者が代わることも想定して、操作につまずいた点などを共有してい

ければと考えています。

また、これは連携以前のデータベース構築、データ整理の話なのですが、例えば、同じ施設内でも歴史と美術では分野が異なるので、必要となる項目も違います。どのように共通の項目を設定するかという点について、苦労していたようです。

こういった観点から、福岡市全体でメタデータフォーマットを統一することはかなり難しいということが分かっていたので、ジャパンサーチでは使用しているメタデータをそのまま反映できるという点はとてもよい仕様だなと思います。

では、最後に、ジャパンサーチに期待することについてお話しいたします。ジャパンサーチと連携することで、先ほど課題として挙げていたこれらの項目を解決できることが見込まれます。

まず、福岡市内の各施設が所蔵している資料について、これまでばらばらに存在していたデータをジャパンサーチという1つの場所で網羅的に公開・検索・閲覧することが可能であるということは、大きなメリットの一つかと思います。課題として挙げていた利用者の利便性の向上にもつながります。

また、福岡市の歴史・文化に関する資料を一括して見られることで、これまで以上に福岡市の歴史や文化に対する理解が深まるのではないかなと期待しています。

そのほかに、既に東京富士美術館さんなどが実践されていますが、ギャラリー機能を用いて過去に実施した展覧会をウェブ上で再現してみたいという声が学芸員から上がっております。

さらに、ジャパンサーチと連携することで、これまでよりも利用者の幅が広がって、より多くの方々に情報を届けられるのではないかなと考えています。この中では、文化財活用課が運用しているホームページにGoogle classroomからの流入が見られまして、授業や課題などで文化財のホームページが活用されているということが分かりました。今後、ジャパンサーチと連携することで横断的な検索が可能となりますので、調べる、考える、つなげるといった自由な使い方も増えていくのではないかと想定しています。

最後に、この連携をきっかけに、福岡市の各施設でまだデジタル化されていない資料もたくさんありますので、そういった文化財資料のデジタル化を進めて、より一層公開できる資料が増えるきっかけになるのではないかなということも期待しております。

私からの報告は以上です。御清聴ありがとうございました。

○司会（奥村） 福菌様、御報告をありがとうございました。

以上、5つの連携機関、そして、連携を予定されている機関の皆様から、地域におけるデジタルアーカイブの構築や活用の事例、ジャパンサーチとの連携を通して達成したこと、また、これから期待することなどについて御報告をいただきました。

御報告からは、デジタルアーカイブの具体的な活用イメージや活用の様々な可能性を感じていただけたのではないかと存じます。

改めまして、御登壇いただきました皆様、貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました。

いました。

では、以上をもちまして、第Ⅱ部を終了とさせていただきます。

ここから再び休憩時間とさせていただきますが、少し時間が押していますので、この後の第Ⅲ部「産業界におけるデジタルアーカイブの活用等」は15時25分から開始とさせていただきます。第Ⅲ部の開始は予定より10分遅れで15時25分からとさせていただきますと思います。

それでは、しばらくの間、失礼いたします。

(休 憩)

第Ⅲ部 産業界におけるデジタルアーカイブの活用等

(5) デジタルアーカイブを活用した地域振興の可能性

○司会（高津） それでは、第Ⅲ部「産業界におけるデジタルアーカイブの活用等」を始めさせていただきますと思います。

第Ⅲ部におきましては「デジタルアーカイブを活用した地域振興の可能性」というテーマで、民間の2団体の方から地域振興に資するお取組を御報告していただきたいと思えます。

登壇者の発表資料につきましては、デジタルアーカイブフェスのホームページ上に掲載いたしておりますので、必要に応じて御活用いただきますようお願いいたします。

また、登壇者への御質問につきましては、ZoomのQ&Aのほうへ御投稿いただきますようお願いいたします。

第Ⅲ部につきましては、御登壇者の発表の後、直接御質問にお答えする時間を設けております。ただし、今回はZoomのみでの御質問の受付となっておりますので、御質問があります場合は、YouTubeではなくZoomのほうから御参加いただきますようお願い申し上げます。

なお、頂いた御質問につきまして、お答えし切れなかった場合、後日、デジタルアーカイブフェスのイベントページに掲載させていただく予定でございます。

第Ⅲ部におきましても、説明スライドの撮影、あるいは録音・録画は基本的に自由でございますけれども、御登壇者のほうから不可の申出があった場合には、それに従っていただきますようお願いいたします。

それでは、最初に、一般社団法人アニメツーリズム協会のお取組事業につきまして、鈴木様より御発表をお願いしたいと思います。よろしくようお願いいたします。

○鈴木氏 今御紹介いただきました、一般社団法人アニメツーリズム協会の鈴木でございます。

本日は、貴重なお時間を頂き、ありがとうございます。

我々はアニメツーリズム協会ということで、正直、実はデジタルアーカイブ利活用といったところとはちょっと遠いのかなと思っておりましたが、今回、事務局さんからお声がけいただきまして、いろいろお話しさせていただいたところ、なるほど、確かにアニメーションというものの自体がデジタルアーカイブの一部という見方もあるよねと。

我々アニメツーリズム協会は、アニメ聖地をテーマに活動しておりますので、そうしたところとのマッチングという意味においては、各地で当協会の会員になっていらっしゃる方々を含めて、活動されている地域がございますので、今回、そうした事例を御紹介させていただければと思っております。

私、鈴木則道は長年出版社で刊行しておりますマンガや小説のアニメ化の仕事に携わっておりました。現在は一般社団法人アニメツーリズム協会の専務理事を務めさせていただいているところでございます。

では、アニメツーリズム協会のアニメツーリズムとは一体何なのかといったところを簡単に駆け足で御紹介させていただければと思います。

「アニメツーリズム」、あるいは「アニメ聖地」という言葉を耳にされることもよくあるのではないかなと思っておりますけれども、もともとアニメ聖地巡礼というものは、アニメファンの方々が自主的にというか、自発的に好きな作品の舞台やモデルとなる場所を特定して、そこを巡ることがスタートと言われている行動のひとつだと認識しております。

舞台やモデルとなった場所を訪れて作品世界を追体験したり、さらに、その地域自体を皆さんの中で深掘りしていくという行動が広がっていった、今、様々な作品の舞台やモデルとなった場所に多くのファンの方々が集まっている。さらに、そこには海外から訪れる方々にも増えている、広がっているというのが現状だと思っております。

次に、アニメ業界を簡単におさらいという感じでお話しさせていただきますと、広い意味のアニメ市場、これはアニメ作品単体で売れているもの以外に、その周辺にありますグッズとか、そうしたものも合わせた売上なのですけれども、この10年ぐらいで1.3兆円から2.7兆円ぐらいと倍ぐらいの規模まで急成長しているという状況でございます。

特にその急成長の要因となっておりますのは、海外でのセールスでございます。現在も広い意味のアニメ産業市場の約半分の売上を海外が占めているということで、それだけ海外で広く視聴されているということが見てとれるということでございます。

それぐらい広がった日本のアニメは、JNTOさんが毎年発表しております「JNTO訪日旅行データハンドブック」でも、訪日した外国人観光客の中で約5%の方々が映画・アニメゆかりの地を訪問したと回答されているのです。つまり、例えば、2019年には3000万人を超える訪日外国人観光客がいらっしゃったわけですが、単純にその5%というと、150万人を超える海外の方々がアニメなどに関心を持って訪日しているということが読めてくるわけです。

日本のアニメはアウトバウンドされることにより海外で大きく成長したわけですが、それを今度は訪日のほうにしっかりと誘導していくことも必要なのではないかと考えており

まして、そうした状況の中で、先ほど申し上げたようなファンの自発的な行動にとどまらないで、作品とか地域をつなげながら訪れたファンの満足度を上げる。そうしたアニメ聖地づくり、地域づくりを行って、アニメによる旅行体験を豊かにしていくという形で設立されたのが当協会でございます。

設立が2016年9月で、会長は「機動戦士ガンダム」シリーズの監督でも有名な富野由悠季さんに務めていただいております。

当協会の活動の大きな柱となっているのは、こちらにあります「訪れてみたい日本のアニメ聖地88」というものでございまして、こちらを毎年、全世界のアニメファンの方々の投票をベースに、作品側とその舞台となっている地域側のそれぞれの了解のもと、発表させていただいているものでございます。

ちなみに、今年、2023年版のアニメ聖地につきましては、昨年6月から9月の間にウェブサイトでの投票、それから、各アニメ聖地に選定させていただいているところなどに投票箱を置かせていただきまして、そうしたところでの投票によって、約11万を超える投票をいただいた上で選定させていただいております。

選定させていただいております作品数が88、作品の中には複数の場所が聖地になっているところがあったりするものですから、場所がいろいろ重複するのですが、作品の聖地としては117か所、それから、アニメ、あるいはマンガに関係するような美術館とか記念館などの施設、イベントなども含めまして28か所を選ばせていただいております、合計145か所の場所を「訪れてみたい日本のアニメ聖地」として選定させていただいているところでございます。

そうした聖地の地域の方々、作品、いろいろな施策を行っていく事業者の方々、それから、もちろんこのアニメを見ているファンの方々、そうした4者がしっかりと連携し合っただけでアニメ聖地・地域を振興させていくということを目指すのが当協会でございます、この4者の間をうまくつないで、しっかりと地域振興につなげていくといったことを目指しています。

具体的には、作品の権利元とか、それぞれの地域の中に立たせていただいて、様々な施策などの実現をスムーズに進められるような仲介的なお仕事を担わせていただいて、各地で様々な取組ができるようサポートを行い、そうした実績などをまとめて情報発信して、より多くの方々に各地域に訪れていただくという活動を行っているというところでございます。

以上が当協会の主な活動でございます、こうした活動とデジタルアーカイブは直接関係していないとは思っておりました。しかし、各地で事業者さんや自治体さんなどとお話ししていると、様々な取組などをお伺いしている中で、今回2件、このデジタルアーカイブの利活用につながるようなお話を伺っておりますので、そうした事例をぜひ今日は皆さんと共有させていただきたいと思っております。

最初に御紹介させていただきますのは、岐阜県多治見市が舞台の『やくならマグカップ

も』という作品です。アニメ聖地というのはいろいろなタイプがあるのですが、特にこの『やくならマグカップも』シリーズ、通称「やくも」と言っているのですが、この「やくも」というのは非常に特色のある作品でございます、何しろこの作品自体が多治見市発のIPといったところが特徴的でございます。

多治見市というと、陶業、陶器の産業が盛んな地域でありまして、その多治見市さんが地元の有志の方々にお声がけして、地域の活性化のために何かできないかといったところ、町を元気にするプロジェクトが2010年にスタートしました。

その呼びかけに対して、地元の企業のプラネットさんという、これは歯医者さんのいろいろな機器をつくっている会社さんなのですけれども、このプラネットさんから、であればマンガで地域の魅力をアピールしたらどうだというアイデアを出していただいて、多治見といえば陶業だということで、焼物・陶芸に打ち込む女子高生の物語をつくろうということでスタートしたのがこの『やくならマグカップも』という作品でございます。

フリーコミックという形で年4回刊行しております。無料で配布しているのですけれども、岐阜県の多治見市を中心とした各地で配布をしているのはもちろんのこと、東京、名古屋、大阪など、全国の協力していただける店舗などにも置いていただいております、現在までに36巻が刊行されているところでございます。そうした形で多治見市発のマンガが2012年からスタートしていたところでございます。

これがテレビアニメになっています。2018年に、アニメーション制作会社の日本アニメーションさんという会社がございまして、多治見市出身の社員が、これをアニメ化したらどうだという提案を社内でしたところ、企画が通って実現したということでございます。

その話を進めていくに当たっては、当然、多治見市さんと連携しようということで進めていくわけです。アニメの制作に当たっては、製作委員会というものを立ち上げて、関係する企業さんとお金を出し合ってテレビアニメを制作していくわけなのですけれども、この作品の製作委員会におきましては、先ほど申し上げた地元企業のプラネットさんが参加して、地元側の窓口役になっていただいたそうです。特に現地多治見での様々な施策を行っていくに当たって、その橋渡し役をやるということで非常に機能したと聞いております。

また、アニメーションを実際に展開していくにあたり、多治見市側でも『やくならマグカップも』活用推進協議会というものを設立して、現地でのプロモーション、あるいは現地での様々なMDの開発なども行っており、アニメ放送に当たっては、現地での様々なキャンペーン、メディア連携などを積極的に行い、現地の盛り上げに一役買っていただきました。

この作品が2021年4月から6月、それから、10月から12月の間にそれぞれ放送されました、全24話がしっかりと放送されて、一旦終わったということでございます。

デジタルアーカイブという意味合いで申し上げますと、完成した『やくならマグカップも』という作品自体をデジタルアーカイブとして、どうやって活用していこうかということで出てきたアイデアが、この映像素材を活用して多治見市の魅力を伝えるような動画を

制作していこうという話です。この映像をもう一回再編成して、3分ぐらいの情報動画を全10話制作したということでございます。

アニメ作品の制作とは違う方をディレクターに立てて、制作をしていただいたわけですが、脚本はアニメの脚本家をお願いして、世界観、テイストはそろえていくという形で制作しています。

さらに、実写パートも新しく撮って、実景なども新たに加えたものを全10話制作いたしました。また、この映像制作に当たって、パンフレットも同時に制作して、現地などで配布をしているというところでございます。

なお、この動画の制作に当たっては、先ほど申し上げた『やくならマグカップも』活用推進協議会と多治見市さんが経費を負担しつつ、岐阜県の「清流の国ぎふ」の補助金も活用して制作されたということで、地元で生み出されたIPがアニメ化を通してデジタルアーカイブ化されて、さらに、その素材を活用して地域の魅力を紹介する動画制作というところまで至る。そうした流れというのは、まさしく地域振興とデジタルアーカイブの活用といった側面から見て非常にいい例なのではないかなと思ひまして、この事例を紹介させていただきました。

そして、もう一つ事例として御紹介させていただきたいのはマンガです。日本のマンガは世界各国でも非常に読まれている。先ほどからお話ししているアニメーションも漫画原作のものが多いということで、日本のマンガは世界的にも知られている存在ですけれども、そのマンガ原稿をデジタルアーカイブ化していくという取組につきまして、横手市増田まんが美術館で行っている事例を御紹介させていただきたいと思ひます。

秋田県横手市の増田まんが美術館は1995年にオープンいたしました。もともと秋田県は、ここにありますように、矢口高雄さんを含めた有名な漫画家さんが多くいらっしゃるのですけれども、その中でも矢口高雄さん、高橋よしひろさん、倉田よしみさん、きくち正太さんと横手市が共同出資をして、このまんが美術館をオープンしたということでございます。

2019年5月にはさらに内容を充実させた形でグランドオープンをしました。このタイミングでマンガ原画の保存を核とした文化施設としてリニューアルしたということでございます。

マンガ原画の保存については、国内外合わせて182人の原画を収蔵するというような形で進んでおります。繰り返しになりますけれども、マンガ文化の源泉である原画は非常に貴重な文化財として最近注目されております。各出版社はマンガ原画を基に雑誌、あるいは単行本を刊行していくわけですが、その元となっている原画というのは、基本的に所有権は作家さんにあります。しかし、膨大な数の原稿がございますので、それを全てしっかりと保存し続けるということは作家さんにも非常に負担ということでございます。そういう意味でも、このような美術館のほうで保管・保存するというのは、非常に意味のあることではないかなと思っております。

横手市増田町は古くから残る蔵の町として知られておりまして、2013年に国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されており、蔵の町である増田で漫画原画を保存するといったこと、これがいわゆるシビックプライドにもつながっていくということで、横手市がこうした取り組みを予算化して、漫画原画の保存・保管、デジタルアーカイブ化をしているというところがございます。

現在、どれぐらいの形で進めているのかといったところは、こちらにあるとおりでございまして、約45万点の原画を収蔵しているところがございます。そのうちデジタルアーカイブ化が完了しているものが約18万点ございまして、日々、デジタルアーカイブ化を進めているというところがございます。

出来上がったデジタルアーカイブにつきましては、美術館に訪れた方々にタッチパネルで拡大したりしながらご覧いただいたり、あるいは市の様々な刊行物などにも利活用させていただいているということで進めているとのことでございます。

今、こうした取組を横手市さんで進めているところですが、こうした取組を受けて、今、様々なところからこの取組に対する理解、支援の輪が広がっているとのことです。

マンガ原画の保存、デジタルアーカイブ化を進めているというところでは、ある意味、この増田まんが美術館は非常に先駆的な事例ではあるのですがけれども、この取組について、漫画家さん、あるいは出版社の理解も進みまして、提供する原画の数が今どんどん増えているところがございます。そうしたところを受けて、収蔵をいかに強化するかということが課題になっているところがございます。

この課題について、今、出版社の小学館さん、集英社さん、講談社さん、KADOKAWAさんが出資した、一般社団法人マンガアーカイブ機構が設立されております。こちらがマンガのデジタルアーカイブ化について、共同で取組を行う動きを進めているところでもあります。

同時に、文化庁さんのメディア芸術連携基盤等整備推進事業でもマンガ原画アーカイブセンターが設立されまして、この窓口も増田で行うとのことで、増田まんが美術館では手狭になってきたということもありまして、すぐ近くの漆蔵資料館にセンター機能を移転しまして、こちらで原画の整理・管理・デジタル化を進めているとのことです。

このように増田まんが美術館で始めましたマンガ原画の保存、デジタルアーカイブ化が少しずつ広がってきております。当然、これは横手市だけで進められるものでもなくなってきておりまして、今、そのほかの自治体さんとの連携なども進んでいるとも聞いております。

また、もともと国でも、かつて国立メディア芸術総合センターという構想がありましたし、さらに、現在検討されておりますメディア芸術ナショナルセンター構想にもつながるような活動だと思っております。今後、そうしたところとの連携も注目される動きではないかなと思っております。

現在、当協会が関わっているアニメ聖地の中ではこうした取組なども行っているところがありまして、デジタルアーカイブを活用した取組がさらに広がっていくのではないかと

期待しております。我々もこうした場をお借りして、各地での活動などについていろいろと広くお知らせをさせていただこうと思っているところでございます。

アニメツーリズム協会からのお話は以上で終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会（高津） 鈴木様、どうもありがとうございました。

まずは、私のほうで幾つかお話をお伺いさせていただきたいと思っているのですが、増田まんが美術館の事例は、行政や現地の方も巻き込んで非常にうまく機能している事例かと思うのですが、その中で、お話があった権利者と出版社の理解ということで、関係者が相互理解をすることが多分とてもポイントなのだろうなと思いました。そういう意味では、アニメ聖地巡礼の事業もそうかと思えます。

今日は自治体の方が結構聞いていらっしゃるかと思いますので、例えば、アニメ聖地巡礼に取り組む際に、双方がウィン・ウィンになる、相互理解できるために、アニメ権利者にとってこういうところが整理されていると連携しやすいなというポイントですとか、逆に自治体にとって、気をつけなければならないポイントがあったら、教えていただけるとありがたいかなと思います。いかがでしょうか。

○鈴木氏 ありがとうございます。

ごくごく一般論で申し上げますと、基本的にアニメ作品を制作する際に、アニメ聖地のために作品をつくっているわけではないといったところが一番のポイントではあるのです。なので、必ずしも皆さん、聖地のために何かをしようというモチベーションを持って作品づくりをしているわけではないのですけれども、ただ、ファンの方々が現地を訪れて、その作品に対する愛とか関心が高いといったところを示す。そして、ファンが集まってコミュニティをつくる。結果としてその場所がコミュニティになるといったことは、ある意味、無視できない活動でもあるので、それをうまく取り込むといったところが作品側には求められることなのかなと思っています。

一方で、地域のほうも、そうしたところを受けて、作品側といろいろなことを組みたいと感じていただく地域も非常に多いわけですが、そのときに、地域側の意見とか、地域側の声というのを一つにまとめて、それを権利者、作品側にしっかりと伝えながらキャッチボールをするという関係性をつくっていくのがとても大切なかなと思っています。

そうしたことを通すことによって、作品にとってもそうした活動が必ずしもマイナスになるわけではない。むしろしっかりと作品側に返ってくるのだよといったことを伝えられるような関係が構築できるというのが一番大切なことではないのかなと思っています。

○司会（高津） ありがとうございました。多治見市の例などは、1人のアニメ制作会社の社員の地元愛から企画が出てきて、それがこんなに大きくなったという展開は、本当に素晴らしい事例かと思えます。やはり地域振興、地元愛を育むというのは非常に大事なのだろうなと思いました。

鈴木様、貴重なお話をありがとうございました。

○鈴木氏 ありがとうございました。

○司会（高津） それでは、続きまして、ANA NEO株式会社の松尾様より、取組事業の御発表をお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○松尾氏

皆様、こんにちは。皆様のすばらしいお話の後に、今日の最後になるかと思えますけれども、ANAグループのANA NEOにおります、私、松尾と申します。本日は、貴重な時間を頂きまして、誠にありがとうございます。

このお時間は「メタバースにおける地域アーカイブの活用と地域創生について」と題しまして、私、ANA NEOの松尾よりお話をさせていただきます。

本日は、今、ANA NEOが開発しておりますアプリとアーカイブに関連した部分で御説明をさせていただきたいと思えますので、よろしくお願ひいたします。

では、まず初めに、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私ですけれども、今、ANA NEO事業開発部でチームリーダーをさせていただいております松尾と申します。1999年にANAグループの旅行会社に入社して以来、商品造成、ウェブ販売に携わりまして、長年、旅行会社のほうで勤めてまいりました。2021年8月から現在のANA NEOのほうに出向いたしまして、メタバース事業に携わっております。

私も内示を頂いたときに、メタバースの事業に行ってくれと言われたのですが、そもそもメタバースとは何だというレベルでした。これは2年前になりますが、メタバースという言葉自体が日本ではあまりなじみのないワードだったのですが、いわゆるメタバースというのは、自分の分身、いわゆるアバターが仮想空間に入り込んで現実世界に近い状態で行動していく。かつ、ほかのユーザーの方とコミュニケーションをとっていただくことができる世界として、急速にこの2年間の間でも浸透し始めました。

私たちはANAグループですが、もちろん航空機でのリアルな移動を提供してまいっておりますが、我々ANA NEOでは、バーチャルな旅体験を基軸にリアルな旅行につなげるアプリということで、2020年8月にANA NEOを立ち上げまして、今、アプリの開発を目下進めております。

ANAグループが持つネットワーク、地域創生事業に絡めて、ゲーミング技術を持つJP GAMES、こちらの会社との合弁企業として誕生しております。

画面左側の鯨の形を模した乗り物のようなものがありますが、これを我々は「時空旅客機」と呼んでおりまして、こちらのANA GranWhale号に乗ってバーチャルで世界を旅したり、ショッピングを楽しんだり、ユーザー同士のコミュニケーションをとっていただくというようなメタバースのアプリを今開発しております。

それでは、私たちが開発中のアプリ、名称としては「ANA GranWhale」と大きな鯨ということで命名しておりますが、こちらを御紹介させていただきますとともに、デジタルアー

カイクの活用とか、デジタルアーカイブとして後世に残していくという取組について、今日はお話をしたいと思います。

このアプリですけれども、VRゴーグルなどの機器を使わずにスマートフォン1つで旅の体験ができるということで、世界中のスマホユーザーにお楽しみいただけます。将来的にはPC版とか、VRゴーグルにも対応していきたいと考えているのですけれども、まず、世界人口の半数の人が所有するスマートフォンで楽しめるアプリとして、今、開発を進めております。

では、ANA GranWhaleの中身はどうなっているのかというところなのですが、初期のローンチの時点では2つの要素をお楽しみいただけます。

まず、左側のSkyモールになります。こちらはバーチャル上での洋服とか、そういったアバターアイテムの購入だったり、リアルの商品のECで、アバターアイテムではなく実際の商品が家に届くというようなEC体験、それから、NFTといったものの購入ができる、いわゆるショッピング体験のエリアです。

それから、メインコンテンツになりますが、バーチャルで旅の体験ができるSkyパークといったものがあります。こちらではV-TRIPと呼ばれる世界各地のスポット、または各地の風景の中で散策するのはもちろんですが、その土地の文化、歴史、各地の名産品、グルメといった情報を得ることができます。

3つ目、右上のSkyビレッジは今後開発予定なのですが、将来的には行政サービス、教育といったものを受けられるサービスに展開を広げていきたいなと思っております。

なので、メタバース空間でショッピング体験、バーチャル旅行体験に加えて、教育や行政まで全てスマートフォン1つで受けられる。我々ANAとしては、そんなサービスを目指しております。

ANA NEOで開発中のアプリですが、もちろん今は日本で開発しておりますが、世界各国での展開に順次拡大してまいります。ANAグループの持つ顧客基盤、チャンネルの活用はもちろんですが、提携パートナーとの顧客戦略により、我々ANAグループが弱いエリアで、提携パートナーさんが強いエリアがありますので、そういったところに向けては一緒に提携しながら、顧客戦略に合わせて国内外のお客様にアプローチをしていくという戦略を持っております。

気になる日本でのローンチですが、間もなく数か月後に予定はしておりますが、その後、順次展開国も拡大し、言語も対応し、例えば、日本の観光スポットをバーチャルで体験していただいて、次回、日本を訪れる際にはそこに行ってみたいという旅のきっかけになるよう、そして、インバウンド需要の創出にも寄与していきたいと考えております。

本日はデジタルアーカイブに関連してということで、V-TRIPをメインにお話をさせていただきますが、Skyモールについても簡単に触れさせていただきたいと思います。

Skyモールでは、アパレル、飲料関係、銀行などといった各企業様とコラボした3D店舗を構築しております。こちらではアバターのアイテムとか、リアルのEC商品の販売を体験して

いただくことができます。

右側はSHIPS様の実在する店舗をバーチャル空間化したものになりますが、こちらでは実在するお店の内観を再現して、店舗でのショッピング体験をしていただくことができます。これは恐らく新しい体験になるのではないかなと思っております。

今日はSkyモールの御紹介はこの辺にしておきまして、メインのバーチャル旅体験、我々は「V-TRIP」と呼んでおりますが、こちらについて御紹介をさせていただきます。

V-TRIPの特徴の一つは、お友達同士とか、御家族とか、場所の離れたユーザーがスマートフォンで同じ旅先の空間に入っていただく。4名までグループを組んで行動していただくことができます。

メタバース空間では、自分たちのグループのほかにも旅好きなユーザーの方がその空間に入ってきますので、バーチャルの旅先で撮った写真の交流とか、実際にリアルで訪れた際の旅行写真などを投稿していただいて、コミュニケーションをとっていただくことができるという、いわゆるユーザー間のコミュニティスペースにもなってきます。

各旅先では、我々が御用意しました個性ある架空のガイドさんが旅先のストーリーを案内してくれます。一部のツアーでは、左側の京都の二条城を歴史学者の磯田道史教授が御案内してくださるなど、実在の人物がガイドするスポットもございます。

各旅先での御案内は、左の画面のようにガイドがテキストで御案内するものもありますし、一部のツアーでは音声で案内してくださるところもあります。例えば、先ほどの二条城などは、磯田教授が磯田教授の声で御案内していただけるというものを御用意しております。

京都駅とか二条城は、一見、3Dグラフィックのように見えるかもしれませんが、これは全て実写です。実写で撮影したデータから空間を生成しています。なので、よりリアルに近い形で旅先を体験していただくことができるということが特徴になります。もちろん空間内では360度をぐるりと見渡せますので、あたかもその場にいるかのような没入感を味わっていただくことができます。

私たちはこのV-TRIPをメインコンテンツとした、旅をきっかけにしたメタバースを開発しているのですが、世の中にはメタバースがもう既に多く出始めてはいるものの、多くはイベントなど、ユーザー同士でわちゃわちゃ騒ぐといったことがメタバースの特徴ですので、そういったものが多い中ではあるのですが、我々ANA NEOのANA GranWhaleにつきましては、旅を軸としたメタバースということで、こちらについては世界で初めて展開してまいります。

国内外の方が、また見たことのない後世に残すべき景色を、バーチャル空間を通じて旅体験していただく。世界中の方々に各地の魅力を知っていただくということを目指しております。

今、日本の観光地もかなり多くバーチャル空間化しておりまして、知られざる日本の魅力を世界の方々にまず認知していただく。日本に行ったらこんなにすてきなところがある

のだということでもまず関心を持っていただいて、次に日本に訪れたときの旅につながる入り口体験をスマートフォンでしていただく。そんなコンテンツを目指しています。

これを我々は「Real in virtual technology」と呼んでおりまして、完全な3Dグラフィックではなく、実写をベースとしておりますので、よりリアルに近い空間を再現しております。

一方で、私もこの撮影に何回か行っておりますけれども、人力での撮影になりますので、街全体を再現するということはなかなか難しく、旅先で一番見せたいスポットとか、季節限定の景色とか、ふだんは立ち入れない場所、こういったものを部分的に再現いたしまして、実際にその地へ行ってみたいと思うきっかけをつくりたいと思っております。

このアプリは、もちろん旅の欲求を100%満たすことはできません。例えば、食事・グルメの体験とか、空気感といったものはその地に行かないと体験できませんので、スマートフォンで全て満足して、そこの地に行かなくなるということは100%ありません。

逆に言うと、写真や映像とともに観光情報を得るような旅番組、ガイドブック、これらと似ているかなと思いますが、何が違うかということ、メタバース空間で自分のアバターが散策する、好きなところへ行けるということで、どちらかということ、能動的に自由に旅先を巡っていただくことで旅の入り口体験をしていただく。これが今回のアプリの特徴的なものになります。

V-TRIPのコンセプトのもう一つとして、旅先を体験した後、実際にそこに行きたいというユーザーの方に対しましては、旅先の宿泊予約とか、航空券とホテルのセットプランとか、そういったリアルな旅の予約も可能な動線を御用意しておりますので、例えば、このスライドでいいますと、世界各地から京都の宿泊が御予約いただけるような、バーチャル体験からリアルな旅をつなぐアプリとして御利用いただけます。

V-TRIPのコンセプトのもう一つですが、実写で撮影したリアルに近いバーチャル空間を生成いたしますが、例えば、世界遺産、歴史的建造物、自然の環境などを再現しております、今ある風景を大切に後世に残していく役割といったところを担っていきたいと考えております。

ここでは一例ですけれども、世界遺産の熊野古道、石川県の金沢ひがし茶屋街、釧路湿原といったところの大自然をバーチャル空間化しまして、どちらかということ、アーカイブ的な役割も担いつつ、この美しい景色を残すために、保全に対しての寄附とか、ふるさと納税等にもつなげようと考えております。

先ほどの熊野古道、ひがし茶屋街、釧路湿原といったところは、現存する風景をバーチャル空間としてアーカイブ的にデジタルで残していくというところもありますが、逆に過去の写真・画像からもバーチャル空間を生成することが可能ですので、例えば、昭和の町並みとか、それ以前の空間をバーチャル空間化することで、過去の世界をメタバース的に体験していただくことも可能になります。

その際には、過去に撮影されたデジタルアーカイブを活用して空間生成を実施していく

予定ですので、地域の方々と連携しながら、そういったものを活用させていただくというところを今進めております。

このページにあるスポットはバーチャル化することが決まっているものではありませんが、我々の希望といたしますか、こういったスポットをバーチャル化したいなと思っているところを言いますと、例えばですけれども、メタバースでその地の歴史や大切な遺産であることを知ってもらいたいと考えています。

例えば、現存する五箇山の合掌集落とか、巖島神社のような文化遺産も今の状態をデジタルでしっかり残していく。軍艦島のような歴史を物語るような文化遺産についても残していき、過去の暮らしの画像から空間を再現することにもチャレンジしたいと思っております。

また、大倉山ジャンプ競技場ですけれども、こういったところでは、例えば、札幌オリンピックが開催された際のアーカイブ映像も活用できますし、北方四島につきましては、もちろん現在は撮影に行くことはできませんので、過去のアーカイブから空間をつくることもできますし、アーカイブ映像で過去の島民の方のお話とか、現在は立ち入れない場所なども紹介していけるといいかなと思っています。

この1年半の間に私もいろいろな自治体の方とお話をさせていただきましたけれども、各自治体様が抱える課題として、このような項目が挙げられております。

すばらしい観光資源はあるものの、少子高齢化とか人口減少により観光客が減少しているということとか、コロナ禍を乗り越える中で、社会インフラのデジタル化を進めないといけないということとか、災害や老朽化による文化財の保全・保護についてのお話も共通してありました。

我々は、デジタルでアーカイブ化することとか、アーカイブを活用させていただくということで、次世代にこの風景を残して、自分のアバターがその地に降り立って旅体験をする。そんな御期待に応えていきたいなと思っています。

自治体の皆様に御協力いただきながら景勝地をデジタルアーカイブ化し、また、デジタルアーカイブを活用させていただくことによって、日本はもとより世界中のユーザーの方が私たちのメタバース空間、このANA GranWhaleに訪れていただくことで、バーチャル体験からその地に行ってみたいというきっかけをつくる。実際に誘客につなげることで地域が活性化し、実装した観光スポットのみならず、その周辺の商業施設とか、ANA NEOという会社なのですが、もちろんANAに限定せず、いろいろな公共交通機関の利用促進につながるようなことを願って開発を進めていこうと思っていますので、もちろん鉄道、船、ほかの航空会社も含めて、その地域につながるような開発をしていきたいなと思っております。

繰り返しにはなりますが、ANA GranWhaleは、街の魅力の発信にとどまらず、遺産、文化、伝統といったものを保全・継承するメタバースとして開発を進めております。

地域創生につきましては、各地の金融機関様とのパートナーシップによりまして、特産品、工芸品の物販に関するビジネスマッチングを行っておりますし、あと、国内外の政府

観光局さんとか、国内の観光協会様とのパートナーシップで、撮影の御協力とか、多大な御支援をいただいております。

その中で、一例にはなりますが、北海道につきましても、北海道庁様、北海道観光振興機構様をはじめとして、北海道放送さん、星野リゾートトマム様など、地域の企業の方々にも御協力いただいております。この中で、アーカイブ映像とか過去の画像からバーチャル空間化を進めているスポットも一部ございます。

ANA GranWhaleは日本ローンチを目前に控えておりますが、ただいま鋭意開発を進めております。世界中の方々が自分のアバターでまだ見ぬスポットを知っていただき、スマートフォンで気軽にバーチャル体験をしていただく。これをきっかけに実際にその地を訪れる。そんな世界をANA NEOは提供してまいります。

ANA NEOの開発中のアプリを含めまして、私からの御説明になります。本日は貴重なお時間を頂きまして、ありがとうございました。

○司会（高津） ANE NEOの松尾様、ありがとうございました。

質問が2つ入ってきましたので、順番にお願いできればと思いますが、1つは、「V-TRIPの景色写真の季節は変化しますか」という質問なのですが、これはいかがでしょうか。

○松尾氏 今のところは撮った時間、撮った季節での空間作成になりますので、その空間が春夏秋冬で変わることは今はないです。ただ、おっしゃるように、例えば、ボタン1つで春の景色から冬の景色に変わるとか、今後、そういったことも考えていきたいなと思っていますので、初期にリリースする段階では特定の季節を御案内するといった形になります。

○司会（高津） なるほど。でも、かなり可能性はあるお話ですね。楽しみでございます。

あと、チャットにも質問が入っています。「旅を軸としたメタバースの活用をビジネス活用するのはとても興味深い取組だと思います。例えば、国立科学博物館のように、展示空間のVRによるアーカイブ映像を持つ文化施設も増えています。こうした既存のVR映像を取り込んで活用するような取組を進めておられたら、教えてください」という質問でございます。

○松尾氏 まず、今、開発しているアプリは、基本的にはVR機器とかは要らない、スマートフォンだけの開発になりますので、VR対応は今はしておりません。この先、PC版とかVR版を開発していく上で、もちろんVRを活用させていただく可能性はあると思いますので、この先、そういった御相談をさせていただければなと思います。

○司会（高津） ありがとうございます。

あと、Q&Aのほうに、先ほどの景色の話に関連する質問が入っております。「景色のアーカイブ化という点は非常に意義があり、興味深いと思いましたが、優先度が高く景色のアーカイブ化を講じている場所はあるのでしょうか」。アーカイブで景色を変える取組を優先してやっている場所はあるかという御質問だと思うのですが、その辺はいかがでしょうか。

○松尾氏 先ほどのスライドの中でいいますと、まだ許可取りといえますか、商談中なので、あまり簡単なことは言えないのですけれども、長崎市の軍艦島さんとか、そういったところはまさに昨日あった建物が今日なくなる可能性もありますし、今も30号棟というのは毎日崩れているので、そういった意味では、早い段階で今の軍艦島を我々のデータの中に残していきたいなということで、長崎市さんとはいろいろお話をさせていただいています。

○司会（高津） なるほど。ありがとうございます。

○松尾氏 あと、景色というか、季節でいうと、例えば、日本の桜というのは外国人の方も非常に興味がありますので、今、実装しようと思っているというか、もうほぼできているのは弘前公園の桜です。こういったところをバーチャルで御覧いただいて、日本の桜というのはこんなにきれいなのだよというのを見ていただいて、実際に弘前に行ってください。全日空は飛んでいないのですけれども、JALさんを使って青森へ行っていただくと。

○司会（高津） なるほど。ありがとうございます。

あと、私のほうから1つ伺いたいののですが、特にデジタルツインではなくて、実写ベースでメタバースをつくられて、撮影が大変というお話だったので、例えば、今日の第I部で御登壇いただいた日置市さんのように、御自身でメタバースを構築されている自治体も大分見受けられるようになってきたかと思うのですが、そういった自治体のメタバースとの連携みたいなものは考えられるものなのでしょうか。

○松尾氏 まだ実現はできていないのですけれども、システムの合う、合わないもあると思いますので、そういったお話があれば、一度お話を聞いて、今後、一緒に展開していくというのも考えられるかなと思います。

○司会（高津） そうですね。ありがとうございます。

○松尾氏 まさに今日、前半のほうにあった縄文遺跡とか、アニメのIPを使ったガイドさんが観光地を案内してくれるみたいなところは、今、いろいろな自治体さんとお話をさせていただいています。

○司会（高津） なるほど。ありがとうございます。

あと、もう一つ、私のほうからよろしいでしょうか。

ANA NEOさんのリリースで、GranWhaleの先行ローンチをアジアのほうでやられるというリリースがあったのですが、そのアジアのほうの手応えとか、その辺、お話しできる範囲で何かあれば教えていただけるとありがたいのですけれども、いかがでしょうか。

○松尾氏 6月13日に先行してタイ、フィリピン、マレーシア、香港、台湾、この5か国のグーグルアプリを先行してローンチしたのですけれども、いい面では、それなりにゲームユーザーといえますか、ANAマイレージクラブ会員も含めて、ダウンロードしていただいているという実績もありますし、一方でいろいろな課題も見えてきていますので、近い将来、日本でローンチするまでに、その辺の課題といえますか、より楽しんでいただける内容にアップデートしながら日本ローンチを迎えたいと思っていますので、ダウンロードは

無料でできますので、また皆様もぜひ日本でローンチした際にはお楽しみいただければな
と思います。

○司会（高津） ありがとうございます。

そうしましたら、ちょうどいい時間になりましたので、松尾様、ありがとうございます
した。

○松尾氏 ありがとうございます。

○司会（高津） またこれからも楽しみに注目していきたいと思います。よろしくお願
いいたします。

それでは、以上「産業界におけるデジタルアーカイブを活用した地域振興に資する取組」
の御報告を2件させていただきました。

アニメツーリズム協会様は、日本の強みであるアニメ・漫画のデジタルアーカイブを地
域振興に活用した事例、それから、一方、ANA NEO様はメタバースという新しい技術に地域
のデジタルアーカイブを活用した事例と、視点の違う2つの民間の好事例だったかと思
います。双方とも非常に将来が楽しみな事例かと思しますので、私どもとしても注目して
いきたいと思っております。

アニメツーリズム協会の鈴木様、ANA NEOの松尾様、貴重なお話をいただきまして、あ
りありがとうございました。

以上をもちまして本日のプログラムは全て終了となりました。

それでは、最後、閉会に際しまして、国立国会図書館、片山副館長より御挨拶をさせ
ていただきたいと思います。

では、片山副館長、よろしくお願いいたします。

<閉会>

○片山副館長 国立国会図書館副館長の片山でございます。閉会に当たりまして、一言御
挨拶を申し上げます。

本日は、1日を通して、デジタルアーカイブに関するパネルディスカッション、セッシ
ョンを開催してまいりました。御多用のところ、非常に多くの方々に御参加いただき、深
く感謝申し上げます。

本日、第I部では、自治体の取組事例の御報告とパネルディスカッションを通して、地
域社会におけるデジタルアーカイブの役割と可能性について御議論いただきました。上智
大学の柴野教授をモデレーターとして、みんなの森ぎふメディアコスモスの吉成様、大分
市教育委員会の串間様、日置市総務企画部の重水様には各機関の取組を御報告いただき
ました。

地域の文化資源の価値に対してデジタル技術を活用するなど、様々な方法で光を当てる
ことにより、市民の注目と理解と共感が得られるよう、創意工夫を凝らしておられること

が印象的でした。

地域の市民交流や文化資源の継承、関係人口の創出など、デジタルアーカイブが地域社会で果たす様々な役割と可能性について、大変示唆に富んでいました。デジタルアーカイブを活用することで地域を知り、人材を育成し、地域の誇りにつながるといふ御報告は、自治体、アーカイブ機関、デジタルアーカイブの活用を考えておられる皆様にとって大きな励みになったと思います。

また、今年で2回目となるデジタルアーカイブジャパン・アワードでは、高野座長が御紹介くださったように、6つの連携機関が受賞されました。誠にありがとうございます。アーカイブとともに構築・連携されてきた協力機関の方々、そして、アーカイブを利用してくださっている皆様に心から敬意と感謝を表します。

第Ⅱ部では、ジャパンサーチと連携、または連携を予定している5つの機関から、それぞれの事業内容やジャパンサーチとの連携、デジタルアーカイブの活用事例を御報告いただきました。これからデジタルアーカイブの構築や活用を進める自治体にとって、大変有用な情報を共有していただきました。

ジャパンサーチとの連携を通じて地域情報の発信を強化したり、地域内の複数のアーカイブを一元的に検索できるポータルとして活用されるなど、地域のアーカイブ機関がジャパンサーチを活用されている事例を御紹介いただきました。

地域やテーマに基づく連携の構築を加速する。そして、市民や地域を超えた人々への文化資源の見える化を加速する役割の一端をジャパンサーチが担っているようにも感じまして、国立国会図書館としても大変ありがたく感じました。

第Ⅲ部では、産業界におけるデジタルアーカイブの観光や地域創生への活用事例を通じて、デジタルアーカイブのビジネス活用の取組を御紹介いただきました。アニメツーリズムと地域資源のマッチングや、メタバースを通じたバーチャルトラベルと地域創生など、デジタルコンテンツと新しい技術の活用が地域の魅力に新しい光を当て、地域活性化に寄与すると実感しました。

さて、当館の役割ですが、昨年4月に「ジャパンサーチ・アクションプラン2021-2025」が策定されましたが、2023年までの重点アクションの1つとして地域アーカイブとの連携拡充が掲げられています。ジャパンサーチのシステム開発・運用と連携実務を担当する国立国会図書館といたしましては、内閣府知的財産戦略推進事務局をはじめ、関係府省と協力し、デジタルアーカイブの活用促進における課題を受け止めつつ、地域アーカイブとの一層の連携・拡充、利活用の促進に努めたいと存じます。

また、書籍等分野のつなぎ役としまして、国立国会図書館サーチと全国の図書館等のデジタルアーカイブとの連携を促進し、国立国会図書館サーチを通じたジャパンサーチとの連携コンテンツも拡充してまいります。

結びに、御参集いただきました皆様の事業・取組のますますの御発展を祈念いたしますとともに、今後ともジャパンサーチへのより一層の御支援、御協力をお願い申し上げます。

て、閉会の御挨拶とさせていただきます。

本日は、お忙しい中、御参加いただきまして、誠にありがとうございました。

○司会（高津） 以上をもちまして「デジタルアーカイブフェス2023ーデジタルアーカイブで地域の価値を再発見するー」を終了いたします。

長時間にわたりお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

なお、ログアウト後にアンケートの画面に移りますので、ぜひ御協力をお願いいたします。

それでは、これにて失礼いたします。ありがとうございました。